

多賀城市埋蔵文化財調査センター年報

—平成 31 年度—

2 0 2 0 年 1 2 月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序 文

多賀城市埋蔵文化財調査センターは、昭和 62 年 4 月開設以来、市内遺跡の発掘調査、展示や歴史学習を中心とした普及啓発、歴史・民俗資料の収集・保管・公開など文化財保護事業を行ってまいりました。

また、平成 19 年に開館した多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）では、市内出土資料による通史展示や民俗資料の展示を行うとともに、常時実施している歴史的な体験学習やイベントを通して、文化財への一層の関心と理解を深めることを目的に活動しているところであります。

さて、本書は平成 31 年度に実施した発掘調査事業及び普及事業について概要をまとめたものです。

平成 31 年度の大きな事業として挙げられるのが、埋蔵文化財調査センターの大規模改修を開始したことです。埋蔵文化財調査センターは開設後 30 年以上が経過し、建物も老朽化が目立ちはじめたため、平成 31 年度から 2 カ年度にわたり実施するものであります。

発掘調査につきましては、埋蔵文化財包蔵地内や隣接地で開発協議のあった 145 件のうち、遺跡に影響を及ぼす 39 件の発掘調査を実施し、遺跡の保護に努めてまいりました。また、歴史遺産調査につきましては、昨年度に引き続き、南宮・山王地区の建造物・石材・仏像の調査を行い、さらに市川・浮島地区の石造物・民俗調査に着手し、地域に残されている貴重な文化財の保護を行っております。

普及事業につきましては、埋蔵文化財調査センターの改修事業のため、企画展は実施できませんでしたが、例年通り、前年度に実施した発掘調査成果を報告する速報展「発掘された遺跡 - 平成 30 年度の調査成果 - 」、資料展として「貞山運河」と歴史遺産調査の結果を紹介した「地域の文化財 - 大代・笠神・下馬村 - 」を開催しました。今後も、展示内容をさらに充実させることで、文化財に対する保護の意識や本市への歴史への関心が高まるよう努めてまいいる所存です。

最後になりましたが、日頃より当センターの運営につきまして、御指導、御協力をいただきました多くの方々に対しまして、厚く感謝を申し上げ、挨拶といたします。

令和 2 年 1 月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 伊藤 文昭

例　　言

- 1 本書は、多賀城市埋蔵文化財調査センターが平成31年度に実施した調査、展示、普及啓発活動、資料管理など各種事業についての概要をまとめたものである。
- 2 本書で使用した遺跡地図は、1/1,000の多賀城市都市計画図（平成22年度版）を複製して作成した。
- 3 本書は大木丈夫が編集し、編者以外が執筆した箇所については目次に示した。

目　　次

1 調査	
(1) 発掘調査概要	1
(2) 歴史遺産調査概要	5 (千葉孝弥・早坂優子)
2 展示	
(1) 展示概要	7 (長久保美智)
(2) 常設展	8 (長久保)
(3) 速報展	8 (丹野修太)
(4) 資料展1	12 (瀧川ちかこ)
資料展2	15 (千葉・早坂)
(5) 市内遺跡発掘調査100執念記念パネル展	18 (小原一成)
(6) 「古代都市多賀城」パネル展	18 (小原(一))
3 普及啓発活動	
(1) 普及啓発活動概要	19 (長久保)
(2) 歴史学習	19 (長久保)
(3) 遺跡調査報告会	20 (丹野)
(4) 歴史講座	20 (小原駿平・早坂)
(5) 刊行物	20
(6) 講演会等への参加	21
(7) 研究発表・執筆など	21
4 資料管理	
(1) 資料の貸出及び掲載	21
(2) 資料調査の受け入れ	21
(3) 収集(寄贈)資料	22
(4) 出土資料の保存処理	22 (小原(駿))
(5) 埋蔵文化財保存活用整備事業	22
5 事務報告	
(1) 埋蔵文化財調査センター改修事業	22
(2) 平成31年度事業費内訳(実績)	23
(3) 組織・職員体制	23
附章1 橋本團貝塚・柳形團貝塚発掘調査学史	24 (小原(一))
附章2 資料紹介 西沢遺跡出土の古代土器について	29 (小原(駿)・桑折肇)
附章3 市指定文化財 天童家文書・菊池家文書	33 (瀧川)

1 調査

(1) 発掘調査概要

平成31年度の発掘調査届出件数は145件あり、93条は130件、94条は15件である。このうち、発掘調査に及んだのは39件で、調査面積の合計は約18,905 m²である。その事業種別の内訳は、国庫補助事業が21件、復興交付金事業が8件、受託事業が6件、大区画ほ場整備事業に伴う調査が2件（事業数としては1件）、市単独事業が2件である。

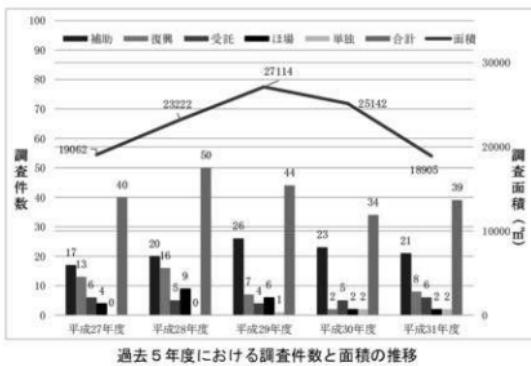
山王遺跡では、16件の発掘調査を実施した。第209次調査では、方格地割の南1道路跡を発見している。第211次調査では、方格地割の西7道路跡と東西大路南1間道路跡の交差点を確認した。

平成27年度から継続している大区画ほ場整備事業に伴う調査（山王遺跡第178・198次調査）では、多賀城南面に広がるまちなみの南側一帯を調査した。この調査では、古墳時代の前期の構造の遺構や後期の竪穴建物跡を発見している。また古代の遺構については、方格地割の基幹道路である東西大路をはじめとして、各南北道路・東西道路を発見したほか、大型の掘立柱建物跡や井戸跡など生活にかかわる遺構を確認している。

西沢遺跡では、古代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を発見している。竪穴建物跡の中には、鉄製の鍔や筋車が出土しているものがあった。

市川橋遺跡では、2件の発掘調査を実施した。第96次調査では、昨年に引き続き、道路跡や井戸跡などが発見され、多賀城南面に広がる街並みの区画内の様子の新たな知見が得られた。第98次調査では、古代の河川跡を調査した。そこから、多くの土師器、須恵器、須恵系土器、軒用瓦、墨書き土器、動物遺体が出土している。

安楽寺遺跡第2次調査では、時期不明の幅約6mの溝跡を発見している。調査地周辺に正応元年(1288)の板碑があり、中世の館にかかわる遺構の可能性がある。



西沢遺跡第37次調査 竪穴建物跡完掘状況



西沢遺跡第37次調査 竪穴建物完掘状況



西沢遺跡第 37 次調査 堀立柱建物跡検出状況



市川橋遺跡第 96 次調査 堀立柱建物跡検出状況



山王遺跡第 209 次調査 南 1 道路跡検出状況



山王遺跡第 178 次調査 溝跡検出状況



山王遺跡第 198 次調査 東西大路検出状況



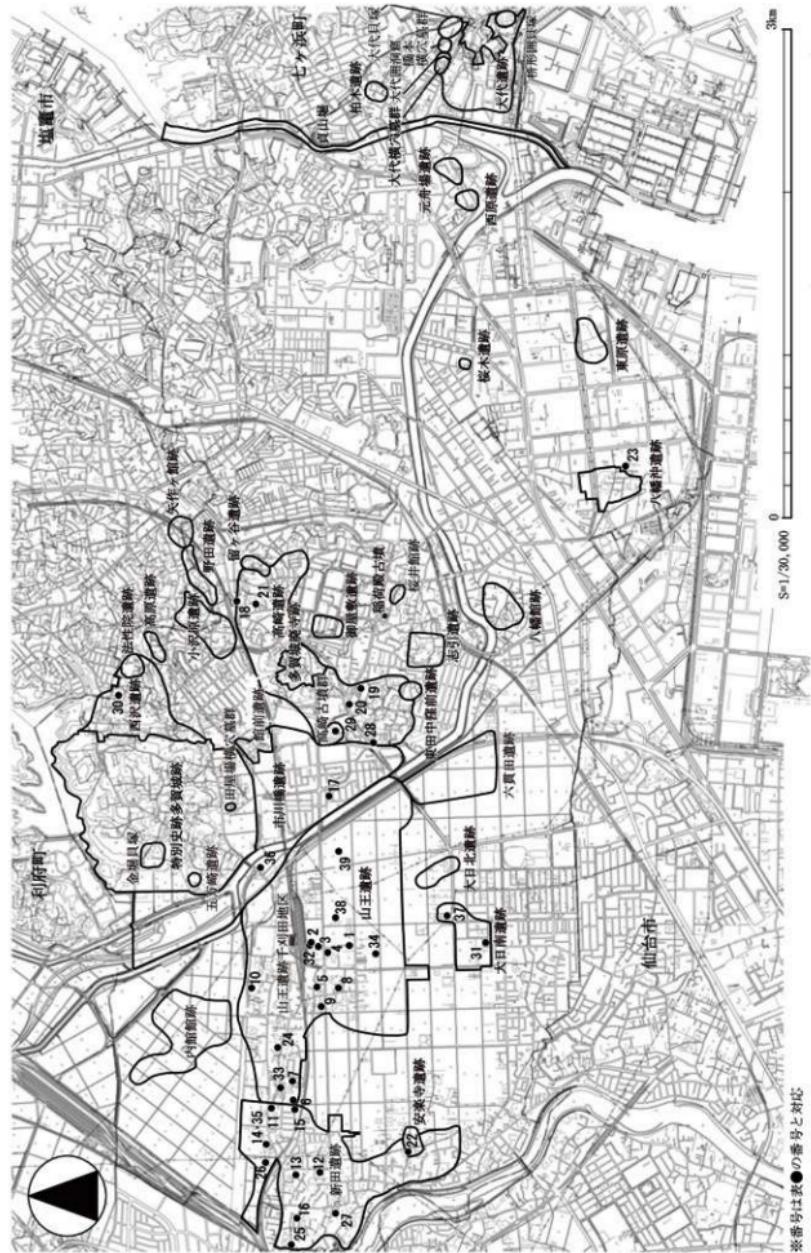
山王遺跡第 198 次調査 遺物出土検出状況



山王遺跡第 211 次調査 西 7 道路跡等検出状況



山王遺跡第 214 次調査 堀立柱建物跡等検出状況



調査地点の位置

※番号は表●の番号と対応

発掘調査一覧

番号	事業名	所在地	調査面積	主な時代	調査内容	所蔵 出土遺物等
					調査実績	
1	単施	山王遺跡 第297次	山王字岡田9番1 平成20年3月20日～4月19日	183sqm	古代	本史跡調査
2	単施	山王遺跡 第115次	山王字岡田9番外北側法堤 外木路 令和元年9月18日～11月29日	10sqm	古代	本史跡調査
3	国 補助	山王遺跡 第98次	平成20年1月16日～6月7日	19sqm	古代	本史跡調査
4	国 補助	山王遺跡 第209次	山王字岡田9番外北側 令和2年4月10日～6月10日	30sqm	古代	確認調査
5	国 補助	山王遺跡 第12次	山王字岡田9番外 令和2年6月11日～7月2日	43sqm	古代	本史跡調査
6	国 補助	山王遺跡 第26次	山王字千手1番外1集 令和2年8月21日～9月20日	128sqm	古代	確認調査
7	国 補助	山王遺跡 第17次	山王字西町10番 令和2年9月26日～9月27日	6sqm	古代	確認調査
8	国 補助	山王遺跡 第19次	山王字中町1番81 令和2年1月12日～12月18日	57sqm	古代	本史跡調査
9	国 補助	山王遺跡 第19次	山王字中町1番83 令和2年4月5日	41sqm	—	確認調査
10	国 補助	山王遺跡 第20次	南京府伊勢22番地外 令和2年5月1日～3月25日	260sqm	—	確認調査
11	国 補助	山王遺跡 第32次	山王字北海福9番3 平成20年4月8日～4月11日	10sqm	—	確認調査
12	国 補助	新川遺跡 第132次	新川字後2番5 令和2年5月7日	8sqm	—	確認調査
13	国 補助	新川遺跡 第135次	新川字後2番5 令和2年5月10日～9月20日	51sqm	古代、半世 人住居建設、井戸跡	本史跡調査
14	国 補助	新川遺跡 第136次	新川字後2番5 令和2年8月27日～9月7日	41sqm	古代	確認調査
15	国 補助	新川遺跡 第138次	新川字後2番5 令和2年8月21日～9月20日	80sqm	—	確認調査
16	国 補助	新川遺跡 第141次	新川字後3番3 令和2年9月21日～9月31日	30sqm	—	確認調査
17	市 補助	市川橋遺跡 第13次	市川橋字前2番1 令和2年4月6日～6月14日	15sqm	古代	確認調査 土師器、須世器、動物遺体
18	国 補助	高崎遺跡 第119次	高崎字下2丁22番1 令和2年7月22日	19sqm	—	確認調査
19	国 補助	高崎遺跡 第120次	高崎字下2丁19番 令和2年7月31日	40sqm	—	本史跡調査
20	国 補助	高崎遺跡 第21次	高崎字下2丁18番1 令和2年8月26日	30sqm	—	確認調査
21	国 補助	高崎遺跡 第22次	高崎字下2丁21番外 令和2年9月27日～10月3日	260sqm	時間不明 半地造成工事	確認調査
22	国 補助	安賀寺遺跡 第20次	安賀寺字西1番 令和2年12月12日～12月17日	10sqm	時間不明 人住居建設	確認調査
23	国 補助	八幡沖跡 隕石坑	芦内一丁目3番2 令和2年12月17日～ 令和2年12月20日	80sqm	—	試掘調査
24	復興	山王遺跡 第10次	南京府伊勢22番の一部、山王字西 町通番5 令和2年5月5日7日～5月23日	70sqm	近世	確認調査
25	復興	新川遺跡 第31次	新川字後2番5 令和2年5月10日～5月20日	41sqm	—	確認調査
26	復興	新川遺跡 第33次	南京府伊勢22番外 令和2年9月12日～9月21日	62sqm	時間不明 人住居建設	確認調査
27	復興	新川遺跡 第39次	新川字後18番外1番 令和2年10月16日～11月15日	53sqm	古代	本史跡調査
28	復興	新川遺跡 第23次	新川字後18番 令和2年10月26日	10sqm	—	確認調査
29	復興	高崎古墳群 第13次	高崎字下2丁1番外 令和2年7月21日～8月9日	100sqm	古代 人住居建設、溝跡	確認調査
30	復興	西ノ遺跡 第37次	浮舟字西60番1 令和2年10月10日～ 令和2年10月26日	25,655sqm	古代 半地造成工事 大建物跡、雁立柱建物跡、溝 跡	本史跡調査 土師器、須世器、須志土器
31	復興	大日南遺跡 第16次	高崎字下2丁1番2 令和2年5月20日	80sqm	—	確認調査
32	受託	山王遺跡 第21次	山王字山王 岡45番1番 令和2年6月17日～11月29日	435sqm	古代	本史跡調査
33	受託	山王遺跡 第13次	山王字西町16番 令和2年6月1日～7月25日	22sqm	—	本史跡調査
34	受託	山王遺跡 第214次	山王字山王岡45番地内 令和2年11月1日～12月20日	200sqm	古代	本史跡調査 土師器、須世器
35	受託	新川遺跡 第10次	南京府伊勢22番地、22番地、23番地、 23番地、30番地、30番地 令和2年3月2日～3月19日	840sqm	古代	本史跡調査
36	受託	市川橋遺跡 第96次	市川橋字伏16番2 平成31年4月1日～令和元年8月 1日	4,509sqm	古代	本史跡調査
37	受託	大日南遺跡 第15次	高崎字大日南18番外 令和2年4月12日～1月18日	175sqm	—	確認調査、本史跡調査
38	浅堀	山王遺跡 第78次	山王字山王1区外 平成20年8月8日～ 令和2年9月22日	4,552sqm	古墳時代、古代 溝跡、雁立柱建物跡、小溝 跡、井戸跡	本史跡調査
39	浅堀	山王遺跡 第196次	山王字山王1区外 平成31年8月8日～ 令和2年3月23日	2,549sqm	古墳時代、古代 溝跡、雁立柱建物跡、小溝 跡、井戸跡	確認調査、本史跡調査 土師器、須世器、陶器、木製品 柱頭部

(2) 歴史遺産調査概要

①調査概要

本市では、平成25年度から市内全城を対象として、江戸時代に市域にあった13の村ごとに文化財調査を行っている。この調査によって、これまで資料化を進めていなかった石造物、棟札や絵馬、人々の信仰にまつわる行事や講、社会組織など、地域の歴史を伝える多くの文化財を確認することができた。

調査の進捗状況としては、平成31年度までに11の村の調査を終え、5冊の報告書を刊行している。今後は、令和2年度すべての地域の調査を完了させ、令和2年度に南宮・山王、令和3年度に市川・浮島地域の調査報告書を刊行する予定である。

②平成31年度の調査成果

平成31年度は、平成30年度に未着手であった建造物調査、石材調査、仏像調査を南宮・山王地域で行った。また、市川・浮島地域の調査も開始し、はじめに石造物調査と民俗調査に着手した。

建造物調査については、東北工業大学ライフデザイン学部生活デザイン学科小山祐司教授に調査を依頼し、南宮の慈雲寺に所蔵されている旧龍藏寺前机、旧龍藏寺厨子、南宮の個人宅で祀られている観音堂の3つを対象にした。旧龍藏寺は利府町にあった黄檗宗の寺院であり、慈雲寺に所蔵されている関連資料は、明治初期に16世觀道秀永和尚が収集したと伝えられている。前机は元禄12年（1699）の記銘があり、厨子も様式から江戸時代中期に作られたことが判明した。観音堂は何回か建替えがなされた痕跡が見受けられるが、古い部分は江戸時代後期の様式を残している。



前机と厨子



前机侧面銘文

石材調査は、東北大学総合学術博物館協力研究員永広昌之氏に調査を依頼し、55基の石造物の肉眼鑑定を行った。その多くはアルコースやディサイトといった近辺で採掘可能な石材であったが、中には縞状砂質泥岩（井内石）も数点あり、主要な採石地である石巻市から運ばれたものと考えられる。

仏像調査は、山形県東北芸術工科大学の長坂一郎教授と山形県白鷹町教育委員会の石井紀子氏に依頼し、慈雲寺に安置されている13体の仏像を調査した。調査は、法量計測、写真撮影、長坂教授による観察が行われ、仏像の種類、制作年代や



観音堂

保存状態などが判明した。中でも、本尊である地蔵菩薩坐像は、安永3年（1774）の「風土記御用書出」には「行基菩薩御作」と記されていたが、今回の調査で底部に銘文が確認でき、文明14年（1482）に八幡宮石崎坊の者によって作られたことが明らかになった。

石造物の拓本による記録作業は市川地域から進め、政庁跡の南側の16基、多賀城碑周辺の3基のほか、個人宅で祀られている板碑など、計30基の記録を完了した。

民俗調査は、市川地域で2人、浮島地域で15人への聞き書き調査を行ったほか、市川の総社宮や浮島の浮島神社の行事記録などを行った。令和2年度は、市川地域での聞き書き調査を本格化させ、すべての地域での民俗調査が完了する予定である。

慈雲寺調査対象仏像一覧

番号	名称	安置場所	制作年代
1	木造地蔵菩薩坐像	本堂須弥壇中央	文明14年（1482）
2	木造大日如來坐像	本堂須弥壇左	江戸時代後期
3	木造菩薩如來坐像	本堂須弥壇右	江戸時代後期
4	木造地蔵菩薩坐像	本堂向かって右段	江戸時代後期
5	木造達磨大師坐像	本堂向かって左段	江戸時代後期
6	木造武山復讐騎像	開山堂中央	17世紀前半
7	木造多財天立像	本堂左回廊右側	江戸時代後期
8	木造虚空門天立像	本堂左回廊左側	江戸時代後期
9	木造地蔵菩薩坐像	本堂左回廊中央	江戸時代
10	木造弘聖太子立像	祝福園（田代牌堂）	江戸時代末期以降
11	木造觀音如來坐像	本堂向かって左の間中尊	近現代か
12	木造文殊菩薩騎馬像	本堂向かって左の間左	近現代か
13	木造普賢菩薩騎象像	本堂向かって左の間右	近現代か



13か村位置図

報告書一覧（平成25～29年度）

刊行年度	報告書名
平成25年度	多賀城市文化財調査報告書第118集 多賀市の歴史遺産 八幡村(一)
平成26年度	多賀城市文化財調査報告書第123集 多賀市の歴史遺産 八幡村(二)
平成27年度	多賀城市文化財調査報告書第130集 多賀市の歴史遺産 笠神村 下馬村
平成28年度	多賀城市文化財調査報告書第136集 多賀市の歴史遺産 大代村 笠神村牛生 留ヶ谷村 高崎村 田中村
平成29年度	多賀城市文化財調査報告書第141集 多賀市の歴史遺産 高橋村 新田村

2 展示

(1) 展示概要

平成31年度は、多賀城市埋蔵文化財調査センター及び多賀城史遊館における常設展示をはじめ、平成30年度の遺跡の発掘調査成果を紹介した速報展、および資料展を2回開催した。資料展の1つ目は『貞山運河』のパンフレット刊行を機に開催した「貞山運河」展である。2つ目の資料展は、平成25年度より継続している歴史遺産調査の成果を一般に公開するもので、前年度に引き続き第二弾として、多賀城旧13か村のうち、大代・笠神・下馬村の成果をもとに「地域の文化財－大代・笠神・下馬村－」を開催した。また、2階展示室改修工事のため一時閉鎖した常設展示に代わり、パネル展「古代都市多賀城」を市役所1階ロビーと文化センターエントランスにて開催した。

なお、埋蔵文化財調査センター常設展示室及び史遊館展示室は、新型コロナウィルス感染拡大防止策として、令和2年3月2日から3月31日までの29日間を休館とした。

平成31年度の埋蔵文化財調査センター展示室の来館者数は総数4,454名であり、1日あたりの平均来館者は約25名であった。特に速報展開催期間中の6・7月の来館者が多い傾向がみられる。

平成31年度展示年間スケジュール

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
埋文 2階展示室												
埋文 3階展示室												
史遊館 第1展示室												
史遊館 第2展示室												
その他												

→ 常設展「古代都市多賀城」
8月24日～10月20日

→ 資料展1
4月1日～2月23日

→ 速報展
6月1日～7月28日

→ 常設展「考古資料からみた多賀城の歴史」
→ 常設展「民俗資料からみた多賀城の歴史」

→ 中川遺跡発掘調査(平成30年度実行終了)
※期間：令和2年7月1日(月)～7月12日(火)

→ パネル展「古代都市多賀城」(市役所・文化センター)
平成24年2月1日(木)～3月30日(金)
文化センター：令和2年3月1日(土)～3月31日(日)

埋蔵文化財調査センター展示室入館者数

	開館 日数	一般	高校	小中	計
4月	26	513	6	115	634
5月	27	491	0	88	579
6月	26	709	26	351	1086
7月	26	581	0	198	779
8月	28	364	3	73	440
9月	25	514	0	59	573
10月	20	335	1	27	363
11月	0	0	0	0	0
12月	0	0	0	0	0
1月	0	0	0	0	0
2月	0	0	0	0	0
3月	0	0	0	0	0
合計	178	3,507	36	911	4,454

埋蔵文化財調査センター展示室研修一覧

	日付	依頼機関	人数
1	4月4日	多賀城市新規採用職員研修	28
2	5月8日	塩釜建設訓練技能者協会職業訓練校	5
3	5月16日	会計検査院田中調査官、県随行者	2
4	5月26日	一般団体	22
6	6月4日	大衡村立大衡小学校6年生	73
7	6月7日	多賀城市立多賀城小学校5年生	110
8	7月3日	塩釜市立第一中学校職場体験	2
9	8月27日	J R 駅長オススメの小さな旅	30
10	8月29日	史遊館ボランティア	8
11	9月3日	埋蔵文化財調査センター遺物整理員	10
12	10月3日	塩竈市教育委員会	8
13	10月6日	クラブツーリズム	25
14	10月11日	大代婦人会	11
15	10月11日	クラブツーリズム	24

(2) 常設展

①埋蔵文化財調査センター「古代都市 多賀城」

多賀城跡の南面で実施した発掘調査により、古代の道路網による方格地割とまち並みが発見され、そこに居住した人々の生活が徐々に明らかになっている。漆紙文書や人面墨書き土器、題簽軸木簡など発掘された遺物を通して、平安時代に多賀城の城下に建設された「古代都市 多賀城」の様相を紹介している。



埋蔵文化財調査センター展示室

②埋蔵文化財調査センタ一体験館（多賀城史遊館）

(1) 常設展示室 1 「考古資料からみた多賀城の歴史」

多賀城市内の発掘調査で出土した考古資料をもとに、縄文時代から江戸時代まで、年代を追った通史展示を行っている。多賀城の歴史の概要を、児童生徒をはじめとした市民にわかりやすく紹介している。



多賀城史遊館常設展示室 1

(2) 常設展示室 2 「民俗資料からみた多賀城のくらし」

「農家の一年～昭和四十年代までの多賀城のくらし～」と題した展示を行っている。多賀城市内で使用されていた農具と、農家の生活に関連する民俗資料を展示し、昭和40年代頃まで実際に多賀城市内で営まれていた農家のくらしを、一年の流れに沿って紹介している。資料に直接触れることができ、当時のくらしの様子を体感できる。



多賀城史遊館常設展示室 2

(3) 速報展

名称：速報展「発掘された遺跡－平成 30 年度の調査成果－」

期間：令和元年 6 月 1 日（土）～7 月 28 日（日）

会場：埋蔵文化財調査センター企画展示室

入館者数：1,371 人

①展示の趣旨

平成 30 年度に本市教育委員会が実施した発掘調査の成果をいち早く紹介することで、市民をはじめ多くの方々に、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めてもらうことを目的に実施した。

また、本市の大代貝塚（橋本圓貝塚）と樹形圓貝塚の発掘調査が実施されて 100 周年となることから、本市で初めて発掘調査された上記 2 遺跡の由緒来歴及び周辺の縄文・弥生時代の様相を紹介し、本市の先史時代について理解を深めてもらうことを目的とした。

②展示の構成

(1) 山王遺跡第 178・198 次調査

大区画ほ場整備事業に伴う調査で、多賀城南面に広がるまち並み（方格地割）の南側一帯を調査した。

この調査では、各南北道路を検出し、当初想定されていた方格地割の範囲が広がることを確認した他、居住域と生産域の境を確認するなど、土地利用のあり方を検討する上で重要な手掛かりを得た。

(2) 山王遺跡第 200 次調査

JR 東北本線陸前山王駅の南側を調査し、掘立柱建物や井戸、土壌などを発見した。遺物は土師器、須恵器、石製品の他に、井戸からは木製品曲物、綠釉陶器などが出土した。

(3) 新田遺跡第 127 次調査

古墳時代後期頃の竪穴建物を確認した。過去の調査においても、この周辺で古墳時代中期から後期にかけての遺構が確認されていることから、当該期の集落が存在したものと考えられる。



速報展ポスター

(4) 八幡館跡第 10 ~ 13 次

八幡保育所の南東側を調査し、竪穴建物、土壌、溝を確認した。竪穴建物は 6 世紀末から 7 世紀中頃のものと、8 世紀末から 9 世紀前半頃のものと考えられる。

(5) 市川橋遺跡第 96 次調査

市川橋遺跡伏石地区の発掘調査で、多賀城南面に広がる道路網のうち、西 3 道路や北 2 道路を確認した。また、区画内から南廻付きと考えられる掘立柱建物や、側板を持つ井戸を複数発見した。

建物の南側に位置する池状の落ち込みからは、完形の素焼きの土器が 100 点近く出土した。この周辺で大規模な宴会が行われ、一括で廃棄されたものと考えられる。

(6) 多賀城市内遺跡発掘調査 100 周年記念パネル展（案内）

本市の大代貝塚（橋本圓貝塚）と楕形圓貝塚の発掘調査が実施されて 100 周年を迎えたことを機に、市役所ロビーにて「多賀城市内遺跡発掘調査 100 周年記念パネル展」を開催したことから、展示の概要を紹介する案内パネルを設置した。

③まとめ

展示全体を見ると、今回は大規模な宅地造成工事に伴う調査や、昨年度に引き続き、大区画ほ場整備事業に伴う調査では成果が充実した。一方で、個人住宅建築に伴う発掘調査の紹介も多く、例年同様に調査面積が小規模であることから、発見した遺構の性格が把握しづらい側面があり、いかに分かりやすく紹介するかが毎年の課題となっている。



埋蔵文化財調査センター展示室速報展入り口



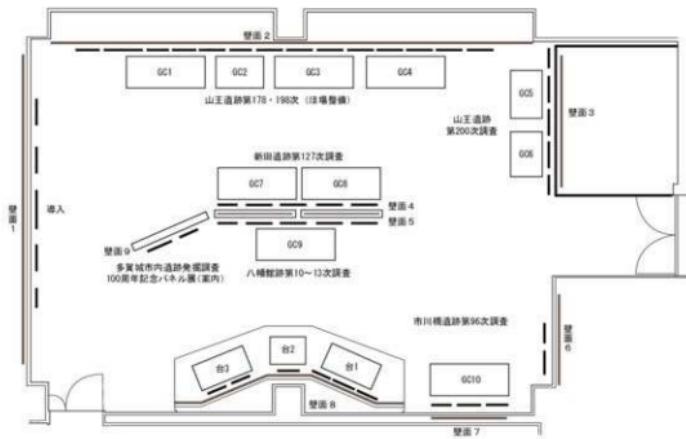
山王遺跡第178次調査



山王遺跡第200次調査



市川橋遺跡第96次調査



速報展展示会場レイアウト

速報展示資料一覧

展示場所	種別	資料名	展示場所	種別	資料名
導入			4. 八幡館跡第10～13次調査		
壁面1	趣旨P	展示趣旨	壁面5	文字P	八幡館跡
	図P	平成30年度調査遺跡一覧		ヨーナーP	八幡館跡第10～13次調査
	図P	調査区位置図		図P	遺構配置図
	図P	年表		写真P	竪穴建物1完掘状況
	図P	多賀城の主な並みと調査区位置図		写真P	調査状況
1. 山王遺跡第178・198次調査				写真P	竪穴建物2完掘状況
壁面2	文字P	山王遺跡	GC9		土師器壺・土師器小壺
	文字P	多賀城地区大区画は場整備に係る発掘調査			土師器甕・須恵器甕
	ヨーナーP	山王遺跡第178・198次調査	5. 市川橋遺跡第96次調査	文字P	市川橋遺跡
	図P	調査区位置図		ヨーナーP	市川橋遺跡第96次調査
	写真P	①調査状況		写真P	調査区全景
	写真P	②井戸検出状況		写真P	池状遺構（市川橋遺跡第2次調査）
	写真P	③西4道路検出状況		写真P	池状遺構
	写真P	④掘立柱建物検出状況			須恵系土器坏
	写真P	⑤東西道路断面		写真P	B区掘立柱建物
	写真P	⑥小溝群検出状況		写真P	A区柱穴断面
GC1	写真P	⑦調査区遠景		写真P	西3道路跡
	写真P	⑧西1道路検出状況	壁面7	写真P	C区井戸跡土器出土状況
	写真P	⑨東西道路検出状況		写真P	A区井戸跡（古）
	写真P	⑩井戸検出状況		写真P	F区井戸跡
	写真P	⑪小溝群検出状況			軒平瓦・平瓦・土師器坏
	写真P	⑫調査区遠景			土師器高大付坏・土師器甕
		土師器器台・土師器甕・石器			須恵器坏・須恵器瓶
		土師器坏・須恵器坏・須恵器甕			土師器坏・土師器鉢
		灯明皿			土師器坏（墨書き土器）
		土師器甕（土器埋設構造）			二彩陶器小壺蓋・灰釉陶器
		土師器坏・須恵系土器坏			緑釉陶器・墨書き土器「葉升」
GC3		墨書き土器「天上」			円面鏡
		墨書き土器「世」・「富」・「加」	6. 多賀城市内遺跡発掘調査100周年記念パネル展	写真P	概要説明
		須恵系土器坏		文字P	会場案内
2. 山王遺跡第200次調査					
壁面3	ヨーナーP	山王遺跡第200次調査			
	写真P	調査区遠景			
	写真P	掘立柱建物柱列			
	写真P	井戸枠出土状況			
	写真P	井戸枠部材取上げ状況			
GC5		勾玉・土師器坏・須恵器坏			
		須恵器壺・水滴			
		灰釉陶器・緑釉陶器			
3. 新田遺跡第127次調査					
壁面4	文字P	新田遺跡			
	ヨーナーP	新田遺跡第127次調査			
	写真P	竪穴建物床面検出状況			
	写真P	竪穴建物カマド遺物出土状況			
	写真P	竪穴建物遺物出土状況			
	写真P	調査状況			
		石製品劍型・石製品有孔円盤			
GC7		筋鍤車・ヘラ状石器			
		土師器高坏・統繩文土器			
		土師器甕・土師器甕・支脚			
GC8		土師器坏・土師器甕			

(4) 資料展1 貞山運河

期間：平成31年4月16日（火）～令和元年5月23日（木）

場所：埋蔵文化財調査センター3階展示室

入館者数：832人

① 展示の趣旨

貞山運河は、木曳堀、御舟入堀、新堀の総称で、阿武隈川から塩竈湾まで、海岸線沿いに延びる全長31.5kmの日本一長い運河である。

このうち本市東部の大代地区に存在するのが御舟入堀で、江戸時代以来現在まで続く物資輸送路としての役割や、地域の生業や年中行事等の場として重要な存在であることから、本市において今後も維持向上すべき「歴史的風致」として位置付けているところである。

平成30年度の文化財パンフレット『貞山運河』の刊行を機に、

仙台藩の水運や、近代以降の本県における重点的な計画において、

極めて重要な位置を占める貞山運河の歴史的価値を広く発信し、その魅力に触れてもらうことを目的に、本展示を開催した。

② 展示の内容

コーナー1. 貞山運河とは

貞山運河は、阿武隈川と名取川の各河口を結ぶ木曳堀、名取川河口から蒲生までの新堀、蒲生から塩竈湾までの御舟入堀、この3つの堀の総称である。開削年代はそれぞれ異なり、江戸時代に木曳堀と御舟入堀が、明治時代に新堀が開削され、明治16年までには「貞山堀」、明治22年に「貞山運河」と命名され、今日に至っている。

ここでは、名称の由来や、開削年代の手掛かりとなる絵図を紹介しながら、運河全体を概観した。

(1) 運河の名称

最も早く開削されたのが木曳堀で、仙台城及び城下町建設にあたり大量の木材を輸送したことから名づけられたと言われている。御舟入堀は、物資輸送の船を入れるという意味、新堀は文字通り明治時代になつて新たに作られた堀である。

木曳堀、御舟入堀の開削年代は明確ではないが、寛文10年（1633）の幕府巡見使による絵図から、木曳堀がこの時期までには開削されていたことが確認された。

また、宮城県公文書館所蔵文書から、「貞山堀」「貞山運河」の名称使用の開始時期のわかる資料を紹介した。

コーナー2. 御舟入堀

御舟入堀は藩領北部から塩竈湾へ送られる米などの重荷を、舟運で城下近くまで輸送することを目的として開削されたものである。塩竈湾に面した牛生から七北田川左岸の蒲生を結ぶ全長7kmの運河で、万治年間（1658～1660）から寛文10年（1670）の間に開削されたと考えられる。

(1) 困難だった開削

かつて砂押川と合流し、七ヶ浜町の湊浜で海に注いでいた七北田川は、泥砂の堆積により徐々に河口の閉塞が進んだことから、それに替わる水路の開削が計画された。和田房長が鹽竈神社に奉納した願文には、水路開削は人為の及ばないところがあるので、神の力を頼むものであると記されている。

こうした一連の計画内容について、具体的に記した資料はないが、上記願文や祈願成就にあたって鹽竈神社に寄進された石燈籠の銘文などによって、ある程度窺うことができる。また、海岸線沿いの浜堤や後



資料展 貞山運河ポスター

背溝地上に立地する御舟入堀が、唯一丘陵部分を通るのが、牛生から塩竈湾にかけての箇所である。現地の地形図を紹介しながら、難工事であった開削の状況を示した。

(2) 和田織部房長

和田氏は、仙台藩の上級家臣で家格は着座であり、房長の時、蒲生村に知行地と屋敷を与えられ、知行高は 1530 石であった。寛文元年（1661）、4 代藩主伊達綱村の時、出入司（財政を司る役）となり、佐々木伊兵衛とともに御舟入堀開削に関わった。蒲生には和田氏及びその家臣の屋敷が設けられ、また、藩の米蔵や塩蔵も置かれるなど、繁栄していた様子を、イラストや和田家館跡の出土資料などで紹介した。

(3) 大代村のなりわい

大代村を通る御舟入堀沿いには、米穀密売買の取締、年貢米の輸送や藩の許可する米穀の出入りを厳重に監視する「御石改所」が置かれた。また、白魚、蜆、鰐、鰻は村の産物として藩に納められ、藩主などの副食にあてられていた。大代地区を描いた明治時代初年の絵図には、御石改所と考えられる建物が描かれ、江戸時代の様子が窺える。また、御舟入堀が物資輸送のみならず、藩主の藩内巡幸にも利用されていたことが、「伊達治家記録」の記載からもたどることができる。

(4) 塩竈の復興

古代以来、鹽竈神社とともに繁栄してきた塩竈の町は、御舟入堀の開削により荷物を積んだ船の入港がなくなり、町はさびれていった。仙台藩 4 代藩主綱村はこのような状況を憂い、振興策として 9 か条からなる「貞享の特令」を出した。このうちの第 5 条に、米以外の荷物は全て塩竈港へ着岸することと定められたことから、塩竈の町は再び活気を取り戻した。

塩竈港に降ろされた荷物は、塩竈街道を通り、また七ヶ浜に荷揚げされた魚介類は浜街道を通り、それぞれ仙台城下へ向かった。さらに御舟入堀を利用した際の経路も含め、城下への複数の道を地図上に落とすことで、城下へ物資が集約されていく様子を示した。「貞享の特令写」は、塩竈ゆかりの仙台藩絵師、小池曲江の写しを展示紹介した。

コーナー 3. 明治時代以降の貞山運河

富国強兵及び殖産興業を緊急の国策とした明治政府は、交通網整備に対する東北各県からの強い要望を受け、大久保利通内務卿はその要として「野蒜築港」を計画した。明治 11 年に閘門（水量調節のための堀）建設、北上運河開削が開始され、その後新鳴瀬川の開削、鳴瀬川河口突堤築造、市街地の造成、東名運河の開削が行われた。



コーナー 1 貞山運河とは



コーナー 2 御舟入堀 1



コーナー 2 御舟入堀 2



コーナー 2 御舟入堀 3



コーナー 3 明治時代以降貞山運河

この一連の事業及び明治維新後の旧藩土救済事業として実施された新堀開削を含め、現在見ることができる貞山運河・東名運河・北上運河といった、宮城県沿岸に沿った運河群が完成した。

ここでは野蒜築港計画にかかる測量図、発掘調査で出土した、野蒜市街地に設置された悪水吐暗渠の土管を展示した。

(1) 仙台新港と貞山運河

昭和37年、宮城県により仙台市長浜（仙台市宮城野区）に新港の建設が計画され、仙台港・塩竈港を結ぶ貞山運河（御舟入堀）を港湾区域に指定することで、仙台港は塩竈港の拡張と位置付けられることになった。貞山運河は仙台港と塩釜港をつなぐ役割を担って現在に至っている。仙台新港と、新港建設によつて分断されてしまったものの、かつての面影を残す御舟入堀の航空写真を通して、昭和の水運の姿を紹介した。

(2) 石積護岸

展示資料一覧

表示場所	資料名	枚数	年代	所蔵
ヨーナー1 貞山運河とは				
壁面1	示すの範囲			
	貞山運河とは（ヨーナーP）			
	運河の位置と名前（イラストP）			
	運河の位置（写真P）			
	貞山運河・東名運河・北上運河（写真P）			
	御舟入堀（地図P）		嘉永19年（1853）	仙台市教育委員会
G.C.1	貞山運河開拓年表		明治16年（1883）	宮城県公文書館
	貞山運河開拓年表		明治16～21年	宮城県公文書館
	貞山運河改修出来形帳		（1883～1888）	宮城県公文書館
	取事事例引議書		明治20年（1887）	宮城県公文書館
ヨーナー2 帝舟入堀				
壁面2	御舟入堀（ヨーナーP）			
	御舟だら開削（写真P）			
	（北山田）成吉の東北上御舟入堀（地図P）			
	（北山田）成吉の東北上御舟入堀（地図P）		元禄14年（1701）	仙台市博物館
	北山田房春の石舟運（写真P）		寛文10年（1670）	（鹽竈神社境内）
	和田房長成吉の石舟運（部分）（写真P）		寛文10年（1670）	（鹽竈神社境内）
	大代地区から塩蔵跡にかけての地形（地図P）			
	大代の初め（写真P）			
	御舟牛海岸底より生数等調査並海底図（図P）		嘉永6年（1853）	仙台市博物館
	海気図（地図P）			
壁面3	和田職業（地図P）			
	和田職業（地図P）			
	和田台家（地図P）		明治38年（1905）	
	和田氏開拓遺跡（地図P）		里	
	大和津社（写真P）			仙台市青葉野区蓬生
	成生羽賀（写真P）（『仙台市史通史編3 近世1』より）			仙台市博物館
	成生羽賀出土の漆器（写真P）		年代不明	仙台市教育委員会
G.C.2	和田職業（地図P）			
	和田職業（地図P）			
	和田台家（地図P）		明治25～8年（1872～1875）	宮城県公文書館
壁面4	大代地区の入り口（写真P）			
	仙台藩領における御舟改所の分布（地図+写真P）			
	御舟改所（写真P）			
壁面5	大代地区航空写真		明治33年（1900）	
	陸前国仙崎郡大代村耕地地図（図P）		明治5～7年（1872～74）	宮城県公文書館
	大代村耕地地図（図P）		明治19年（1886）	
壁面6	大代の小舟（写真P）		享保元年（1716）	仙台市博物館
	鶴山公於御記録（写真P）		享保17年（1732）	仙台市博物館
壁面7	塗ぬり地図（説明P）			
	仙台城下への道（地図P）			
G.C.4	物語東洋の定着年表		嘉永元年（1852）	
	物語東洋の定着年表			
壁面8	現在の地図と古地図（写真P）		丁度1年（1704）	鹽竈神社博物館
	（外）の舟合戸（小舟番口）		江戸4年（1847）	鹽竈神社博物館
	御舟園文（小舟番口）		江戸8年（1851）	鹽竈神社博物館
ヨーナー3 明治時代以降の貞山運河				
壁面9	明治時代以降の貞山運河（ヨーナーP）			
	明治時代以降の貞山運河（ヨーナーP）		明治14年（1881）	東松島市教育委員会
	明治時代以降の貞山運河（ヨーナーP）		明治14年（1881）	東松島市教育委員会
	東名運河と松島橋、野蒜施設と東名運河・東北運河の位置（写真P）			
	大代地区開拓地図（写真P）		明治16年（1883）	東松島市教育委員会
	御舟改所と貞山運河（写真P）		明治16年（1883）	東松島市教育委員会
	御舟改所と舟舟入堀・建設が進む仙台港（写真P）			
	石橋渡屋（説明P）			
	渡岸の位置・容積み渡岸・中洲の石積み渡岸（大代地区）			
台1	野蒜市街地出土土管		明治14年（1881）	東松島市教育委員会

方形に加工した石を、横に目が通るように積み上げる布積みに対し、平石の隅を立てて積むのは谷積みと呼ばれる。布積みは明治 20 年代初め頃、谷積みは明治の終わり頃のものと考えられており、石積は日本の近代的土木遺産ということができる。大代地区の中洲では、石積護岸の変遷を見ることができたが、東日本大震災の津波により大きく損傷してしまった。かつての護岸の様子を写真パネルで紹介した。

③ 課題

本展示は、文化財パンフレット『貞山運河』の刊行を機に、仙台藩の水運や、近代以降の本県における重点的な計画において、極めて重要な位置を占める貞山運河の歴史的価値を広く発信し、その魅力に触れてもらうことを目的に実施したものである。

本市東部に存在する御舟入堀は、貞山運河を構成する水路の一つで、江戸時代、仙台藩領北部からの物資を仙台城下へ輸送する極めて重要な水路であったが、これまで一般向けのまとまった冊子がなく、また展示を開催する機会も逸していた。今回パンフレットを作成し、さらに御舟入堀を中心に、貞山運河の概要を紹介できたことで、周知への第一歩が踏み出せたものと考えている。

貞山運河は知名度に比べ、その内容や価値が広く知られているとは言い難い。複数の水路で構成され、開削時期も用途も異なることに加え、関係する資料は決して多くはない。運河全体の歴史的内容を的確に把握し、平易な言葉で表現するには、限られた資料の読み込みが不可欠である。今回は、主に刊行物を基に概要を紹介するにとどましたが、今後、同時代の資料に基づいた検証を踏まえ、展示等を行う必要があると考えている。アンケートにも、再度の開催を希望との記載があったことから、新たな調査成果による展示を目指していきたい。

資料展 2 「地域の文化財 一 大代・笠神・下馬村一」

期間：令和元年 8 月 24 日（土）～ 10 月 20 日（日）

場所：埋蔵文化財調査センター 2 階展示室

入館者数：1,156 人

① 展示の趣旨

本市では平成 25 年度から市内全域を対象とした文化財調査を行っている。この調査は、江戸時代多賀城市域にあった 13 の村ごとに実施しており、これまで資料化していなかった地域の歴史を伝える多くの文化財を確認できた。そこで平成 30 年度から、地域の特色ある歴史を文化財調査の成果をもとに旧村単位で紹介することとし、第 2 回にあたる本展示では、平成 27 年度に調査を行った旧大代・笠神・下馬村を取り上げ、地域に残る多くの資料から 3 つの地域とそこに暮らす人々の歴史を紹介した。

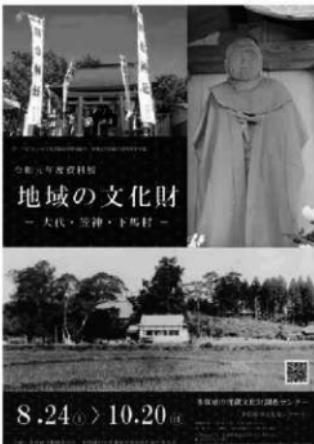
② 展示の構成

(1) 地図と写真にみる地域の変化

市内東部に位置する 3 つの地域は、海軍工廠の建設や国道 45 号沿線の著しい市街地化など、変化の大きい地域である。コーナー 1 では、絵図や古地図、航空写真からこれらの地域の移り変わりを紹介した。

(2) 神社合祀と市内東部の神社

明治 39 年に始まる明治政府の神社合祀政策は多賀城村にも及び、本市東部では、笠神の村鎮守である



資料展 地域の文化財ポスター

仁和多利神社に周辺の神社が合祀された。コーナー2では、笠神の仁和多利神社、大代の柏木神社、昭和24年まで多賀城村の一部であった塩竈市牛生の須賀神社を紹介し、当時の神社合祀と現在まで残るその影響について取り上げた。

(3) 下馬七軒と鎌倉神社

明治の初め頃、下馬村は戸数7戸と、市内にあった13の村の中では最も規模の小さい村で、ここには仙台藩家臣芦立氏の在郷屋敷が存在していた。コーナー3では、相互扶助組織である契約譲や、地域の鎮守である鎌倉神社の資料を展示し、芦立家とその周辺の6戸の旧家が中心となった下馬の歴史を紹介した。

(4) 海軍工廠建設と地域の変化

海軍工廠とは海軍直属の軍需工場で、多賀城海軍工廠は昭和18年に開庁し、笠神には火工部が置かれ、下馬の伝上山地区には工員住宅が建設された。コーナー4では、海軍工廠建設に伴う集落の移転やその影響について紹介した。

(5) 仙台港建設と大代北区

昭和42年に始まった仙台港の建設工事では、用地内にあつた集落の移転が必要になり、その移転者の一部を受け入れるための宅地造成によって現在の大代北区ができた。コーナー5では、建設用地になった北新田から移された地蔵像の祭祀などを取り上げ、移転後も続く人々のつながりを紹介した。

(6) 沿岸部の人々の暮らし

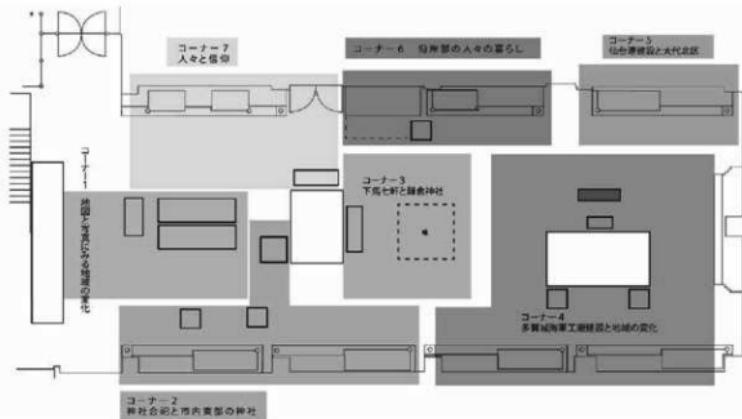
本市東部を通る貞山運河は、その沿岸地域から塩竈湾へと抜ける重要な交通路であり、漁業の場となっている。コーナー6では、漁労に関わる民俗資料や信仰との関わりを取り上げ、海に寄り添い育まれた人々の暮らしの歴史を紹介した。



展示状況



コーナー7



資料展展示会場レイアウト

(7) 人々と信仰

地域内には村镇守をはじめ、多くの神仏が祀られている。また、人々の信仰はムラの外へも向けられ、遠方の神社への組織的な参拝も行われてきた。コーナー7では、神社仏閣や講を取り上げ、地域の人々の信仰の歴史を紹介した。

③まとめ

本展示では、身近であるために見過ごしてしまったがちな地域の歴史、現在の暮らしに焦点を当て、地域で守り伝えられてきた資料を多く展示した。展示資料49点の内39点は地域住民が所蔵するもので、普段は目にできない貴重な資料をもとに展示を構成し、その存在を広く紹介することができた。

アンケートでは、展示内容の満足度を問う項目に対し、回答者の63%が「満足」、34%が「やや満足」と答えており、全体の97パーセントが肯定的な反応を示した。今回の展示では、昨年度の地域展同様、対象地域の住民が多く訪れていることがアンケートや来館者とのやり取りから明らかであり、自らの地域への関心の高さを反映した結果となった。

資料展「地域の文化財 - 大代・笠神・下馬 -」展示資料一覧

コーナー	番号	資料名	年代	点数	所蔵者
コーナー1 地図と写真にみる地域の変化	1	陸前国宮城太代村耕地地圖	明治5~7	1	宮城県公文書館
	2	陸前国宮城村地引地圖	明治6~	1	宮城県公文書館
	3	陸前国宮城郡下馬村	明治22以前	1	宮城県公文書館
コーナー2 神社合祀と市内東部の神社	4	神社合祀願	明治42	1	宮城県公文書館
	5	縁札	元禄12	1	仁和多利神社
	6	縁札	文政11	1	仁和多利神社
	7	縁札	明治4	1	仁和多利神社
	8	縁札	明治11	1	仁和多利神社
	9	縁札	昭和2	1	仁和多利神社
	10	縁札		1	仁和多利神社
	11	縁札(須賀神社)	明治23	1	仁和多利神社
	12	縁札(荒石神社)	明治37	1	仁和多利神社
	13	縁馬		1	仁和多利神社
コーナー3 下馬七軒と錦倉神社	14	縁馬		1	仁和多利神社
	15	祇園講當前帳	昭和12	1	祇園講
	16	柏木明神祈禱札		1	柏木神社
	17	風土記説用書出	安永3	1	宮城県図書館
	18	契約覚書	明治8	1	個人蔵
	19	縁	昭和45	1	錦倉神社
	20	縁	昭和52	1	錦倉神社
コーナー4 海軍工廠建設と地域の変化	21	「多賀城海軍工廠施設員各案」位牌		1	西園寺
	22	土地賣渡書写	明治17	1	西園寺
	23	縁願	享保20	1	西園寺
	24	縁	文政11	1	西園寺
	25	阪本		1	西園寺
	26	阪本		1	西園寺
	27	大教説		1	西園寺
	28	觀音説教輪		1	西園寺
	29	山の神説教輪	嘉永6	1	下馬山の神説
	30	善行契約請記録	昭和23~52	1	原田利: 西園寺
コーナー5 仙台港建設と大代北区	31	木箱蓋	明治31	1	大代北区
	32	掛軸		1	大代北区
	33	掛軸		1	大代北区
コーナー6 沿岸部の人々の暮らし	34	カサケンコ		1	多賀城市教育委員会
	35	ワク		1	多賀城市教育委員会
	36	ガラス玉		1	多賀城市教育委員会
	37	網		1	多賀城市教育委員会
	38	古峯神社講中代持拂	昭和48	1	大代古峯講
	39	縁	平成9	1	大代古峯講
	40	縁札	昭和55	1	個人蔵
	41	縁札	平成元	1	個人蔵
	42	縁願	大正14	1	個人蔵
	43	帳獨立	大正10	1	個人蔵
コーナー7 人々と信仰	44	縁	昭和30	1	個人蔵
	45	日月寺守護容器(本那吉良)一式		1	柏木神社
	46	日月寺守護容器(本那吉良)一式		1	柏木神社
	47	掛軸	明治5	1	大代山の神説
	48	掛軸		1	大代山の神説
	49	御観音説名簿	昭和37	1	大代山の神説

(5) 市内遺跡発掘調査 100 周年記念パネル展

期間：令和元年 7 月 1 日（月）～7 月 12 日（金）

会場：多賀城市役所 1 階エントランスホール

平成 31 年（2019）は、大正 8 年（1919）に本市で初めてとなる大代貝塚（橋本匂貝塚）と桙形匂貝塚が発掘調査されてから 100 周年にあたる。本展示ではそれを記念して、本市で初めて発掘調査された上記 2 遺跡の由緒来歴及び周辺の縄文・弥生時代の遺跡を紹介することで、本市の先史時代について理解を深めてもらうことを目的として開催した。



市内遺跡発掘調査 100 周年記念パネル展の様子

展示内容は、2 つの遺跡の発掘調査に至る背景、関連する人物、発掘調査の内容等についてパネルで説明したほか、通常は多賀城史遊館で常設展示している桙形匂貝塚出土土器のレプリカを展示した。

(6) 「古代都市多賀城」パネル展

期間：令和 2 年 2 月 21 日（金）～5 月 22 日（金）

会場：多賀城市文化センター入口ホール及び多賀城史遊館 2 階廊下壁面

期間：令和 2 年 3 月 13 日（金）～年 4 月 9 日（木）（令和 2 年度まで継続）

会場：多賀城市役所 1 階エントランスホール

平成 31 年度より工事を開始した当センター改修事業により、常設展を長期間にわたり休館せざるを得なくなり、古代都市多賀城に関する情報発信ができない状況となった。このことから、常設展休館中における情報発信を目的として、常設展の内容を要約した「古代都市多賀城」パネル展を開催した。

特に市役所 1 階エントランスホールで開催したパネル展には、平成 30 年度の発掘調査速報の内容を取り込んだほか、令和 2 年 2 月のは場整備事業に伴う発掘調査で東西大路側溝から出土した人面墨書き土器も展示了。



「古代都市多賀城パネル展」の様子



山王遺跡出土人面墨書き土器

3 普及啓発活動

(1) 普及啓発活動概要

当センター主催事業としては、速報展の関連企画として平成30年度の発掘調査成果を紹介した遺跡調査報告会、本市の縄文時代から中世までの通史を扱った歴史講座を開催した。史遊館を主体とした歴史体験学習事業としては、まが玉づくりなどの通常体験のほか、募集型の歴史体験学習を開催した。特に通常体験は、市内や近隣自治体の小中学校への積極的なPRにより、家族連れの来館者や学校現場で取りあげられる機会が増加した。

また依頼対応事業としては、二市三町連携行事「春日バーキングまつり」「親子でチャレンジ 縄文土器づくり」等、他機関と連携を図った館外での活動が盛況であった。さらに、地元の歴史を紹介する講座等への協力や、宮城県考古学会、古代城柵官衙遺跡検討会からの依頼による発掘調査成果報告を行った。

平成31年度の主な歴史体験学習

6月8日	網代編みコースター	主催
7月6日	二市三町縄文土器づくり(成形)	主催
7月27日	春日PAまつり	依頼対応
8月3日	二市三町縄文土器づくり(焼成)	依頼対応
11月1,2,3,4日	文化財保護強調週間 (まが玉)	依頼対応
11月16日	大人のための紫草染め体験	主催
12月14日	文化センターこどもまつり —まが玉、らでんー	依頼対応
12月26日	お正月の準備 —親子でつくる鏡餅—	主催
2月22日	大人のための貝雛づくり	主催



小学校での出前授業の様子



文化センターまつりの様子

(2) 歴史学習

多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）の利用状況は以下の通りである。

史遊館を主体とした歴史学習事業については、通常体験としてまが玉づくり、縄文カゴづくり、貝絵付け、横笛づくり、らでんマグネットづくり、火おこし体験、拓本体験、貝合わせ、かるた、ぬりえを実施した。また、募集型歴史体験学習として、網代編みコースターづくり、紫草染め体験、鏡餅づくり、貝雛づくりを開催した。そのほか、小中学校からの要望に応じて、出前講座等へも随時対応した。

平成31年度の史遊館利用者数は総数5,064名であり、1日あたりの平均人数は約20名であった。特に団体による体験学習や研修授業が多い月の利用者数が突出した結果となった。

平成31年度多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）利用状況

月	開館 日数	利用統計						利用内訳			
		一般		高校		小中		計	展示 見学	研修 授業	
		館内	館外	館内	館外	館内	館外				
4月	26	47	0	0	0	69	0	116	88	28	0
5月	27	95	28	0	0	79	0	202	195	7	0
6月	26	115	31	0	2	641	47	836	653	0	183
7月	26	80	160	0	0	215	398	853	851	2	0
8月	27	152	22	0	0	119	22	315	307	8	0
9月	25	68	430	0	0	64	427	989	979	10	0
10月	26	117	119	0	0	458	189	883	883	0	0
11月	26	114	78	0	0	70	78	340	340	0	0
12月	23	52	4	0	0	108	37	201	201	0	0
1月	23	27	0	0	0	66	0	93	93	0	0
2月	25	50	11	0	0	174	0	235	0	0	0
3月	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0
合計	281	1,801	2	3,261	5,064	4,826	55		183		

平成 31 年度多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）歴史学習実績

月	い・つでも体験（有料）										い・つでも体験（無料）										イベント等体験					
	1ヶ月以内	2ヶ月以内	3ヶ月以内	4ヶ月以内	5ヶ月以内	6ヶ月以内	7ヶ月以内	8ヶ月以内	9ヶ月以内	10ヶ月以内	11ヶ月以内	12ヶ月以内	1ヶ月以内	2ヶ月以内	3ヶ月以内	4ヶ月以内	5ヶ月以内	6ヶ月以内	7ヶ月以内	8ヶ月以内	9ヶ月以内	10ヶ月以内	11ヶ月以内	12ヶ月以内	イベント・体験名	実施日
9月	360	86	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	360	86	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
10月	26	0	0	0	2	0	0	0	2	0	11	0	24	54	0	0	15	0	0	0	2	22	22	0	0	
11月	2	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	24	46	28	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
12月	201	88	22	62	12	0	6	0	10	0	33	0	447	299	216	11	0	27	9	19	106	106	0	0		
1月	99	0	9	0	12	11	11	0	6	11	0	25	0	267	157	110	11	0	0	27	20	10	68	48	0	
2月	29	0	13	0	12	0	8	0	11	0	20	0	99	99	9	18	0	0	21	6	3	69	69	0	0	
3月	27	290	14	0	5	279	2	0	2	0	13	0	634	63	321	3	0	0	6	4	4	17	17	0	0	
4月	33	258	10	0	0	11	0	2	0	20	0	22	0	361	103	258	37	80	0	8	2	9	96	96	0	
5月	20	356	16	0	0	0	2	0	0	0	11	0	210	54	156	1	0	0	14	4	0	19	19	0	0	
6月	30	79	16	0	0	0	0	0	0	0	13	0	30	0	68	29	16	0	0	13	8	0	51	51	0	
7月	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
8月	11	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	27	32	11	9	0	0	10	2	4	25	25	0	0	
9月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
小計	447	985	150	90	24	801	20	0	80	0	201	0	2,286	984	1,370	188	40	0	153	50	62	498	456	80	30	161
合計	1,203	2,86	473	22	0	80	201	0	2,286	1,908	2,740	228	0	153	50	62	498	456	80	30	161	0	0	0	0	

(3) 遺跡調査報告会

名 称：多賀城市遺跡調査報告会－平成 30 年度の調査成果－

開催日：令和元年 6 月 29 日（土）午後 1 時半から午後 3 時半

会 場：市民活動サポートセンター大会議室

参加人数：55 人

当センターが実施した山王遺跡第 178 ~ 198 次調査、市川橋遺跡第 96 次調査、八幡館跡第 10 ~ 13 次調査の成果報告ならびに、多賀城市内遺跡発掘調査 100 周年を記念した発掘調査学史の紹介を行った。



遺跡調査報告会の様子

(4) 歴史講座

名 称：平成 31 年度 史都多賀城 歴史講座

受講者数：54 人（延べ 138 人）

郷土の歴史・文化への关心を深め、文化財保護の思想を啓発することを目的として、繩文時代から戦国時代までの多賀城の歴史を取り上げた通史的内容の講座を 4 回にわたり開催した。

	開催日時	開催場所	題名	
第 1 回	10月24日（木） 14:00~15:30	中央公民館 第4会議室	繩文～弥生時代の多賀城と東北地方	埋蔵文化財調査センター 技師 佐藤純平
	10月31日（木） 14:00~15:30	中央公民館 第4会議室	古墳～奈良時代の多賀城と東北地方	埋蔵文化財調査センター 主査 丹野修太
第 3 回	11月7日（木） 14:00~15:30	中央公民館 第4会議室	平安～鎌倉時代の多賀城と東北地方	埋蔵文化財調査センター 技師 小原駿平
	11月14日（木） 14:00~15:30	中央公民館 第4会議室	室町～戦国時代の多賀城と東北地方	埋蔵文化財調査センター 主査 大木丈夫

(5) 刊行物

多賀城市埋蔵文化財調査センター年報－平成 30 年度－

多賀城市文化財調査報告書第 144 集 多賀城市内の遺跡 2－平成 30 年度ほか発掘調査報告書－

新田遺跡 高崎遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡 安楽寺遺跡 八幡沖遺跡隣接地

多賀城市文化財調査報告書第 145 集 山王遺跡ほか

山王遺跡 206 次調査 山王遺跡 211 次調査 山王遺跡第 213 次調査 大日南遺跡第 15 次調査

(6) 講演会等への参加

開催日	題目	事業の名称	主催団体
令和元年5月8日	多賀城の歴史について	答の会	
令和元年7月30日	多賀城の歴史について	宮城県県民協会仙台東支部 多賀城地区会	
令和元年7月30日	歌枕と多賀城	多賀城歴史トーク	多賀城市立図書館
令和元年9月14日	プラサンノウ	山王歴史講座	山王地区公民館
令和元年11月27日	地域の史跡について	社会教育事業	大代地区コミュニティ推進協議会
令和2年2月7日	多賀城の歴史について		新田中区老社学級

(7) 研究発表、執筆など

題目・著者	基調講演
「東北地方における心蘭文時代多賀城研究の現状」、「宮城県における調査文時代墓誌の諸問題」【考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による調査会論文集の内構造】	科研費「考古学・人文学・文化財科学の学際的研究による調査会論文集の再構築」研究会(研究代表者：山田勝弘(領田歴史民俗博物館))
「山王道跡第78・196次調査・市川橋遺跡第96次調査」	宮城県考古学会
「令和元年度宮城県遺跡調査実施報告会資料」	
「山王道跡第78・196次調査」	古代城壁宮城遺跡検討会
「鳥取おくるのほぞ造の風景地、意碑（つぼの石みぶ）・奥井・末の松山保育活用計画について」	独立行政法人国立文化機構
「平成30年度 遺跡整備・浜川研究集会報告書」史跡等の保存活用計画	奈良文化財研究所
「歴史の多様性と価値の多様性」	

4 資料管理

(1) 資料の貸出及び掲載

依頼機関等	依頼(貸出理由)	貸出期間	資料名
東北歴史博物館	総合展示室中庭の展示に利用するため	令和3.4.1 ～2.3.31	新田道跡出土資料 天日茶碗、かわらけ(在地名)、小からけ(京都系) 切削、床足、下駄、草履、小柄、骨 各1点
株式会社吉川文庫	『新しい古代史へ 2 文字文化のひろがり』への掲載のため		仙台館主屋復元図 1点 山王道跡千堀田地区出土漆塗軸巻本兼葉 紙 1点 組物の使用方法西尾良真 1点 漆入れた油の容器とふた紙(漢元) 紙質 1点
株式会社汲古閣	『中世南条羽の城壁諸跡』への掲載のため		青木助六父子運筆書枕草真(天宝家文書) 1点
福島県立博物館	企画展「どうぶつの考古学」における展示用のため。また解説図解、ホームページへの掲載のため	令和3.8.30 ～11.20	永相助羅出土漆角製器身具 9点
七ヶ浜町教育委員会	『わいたちの山の羊と鹿』への掲載のため		古代の堅穴掛物鈴写真 1点
個人	『研究会筋訪』(「公財」千葉県振興財團開館)への掲載のため		市川橋遺跡第9次調査出土ナイフ形石器実測図 1点
(公財)福島市振興公社	企画展「古代地区的古代」で展示するため	令和3.11.14 ～2.2.12	市川橋遺跡第9次調査出土須恵器共振鏡 1点
株式会社吉川文庫	『新しい古代史へ 3 交通・情報となり』への掲載のため		市川橋遺跡出土「私馬」木簡、結馬刀真 2点
宮城県多賀城跡調査研究所	多賀城跡調査研究会所設立50周年記念企画多賀城調査で使用するため	令和3.11.23	柏木道跡遺構写真 6点
(公財)福島県文化振興財团	企画展「ふくしま戦ものがたり」の解説文に掲載するため		柏木道跡遺構写真 2点 柏木道跡復元イラスト 1点
宮城県教育委員会	「令和元年度宮城の発掘調査バーメル展示及びパンフレット掲載のため」	令和3.1.15 ～4.3	山王道跡発掘調査写真 8点 山王道跡図面 1点 市川橋遺跡発掘調査写真 5点 市川橋遺跡経路 1点
宮城県多賀城跡調査研究所	シンポジウム「歴の道をたどる」における発表で使用するため	令和3.3.8	柏木道跡遺構写真 12点
宮城県多賀城跡調査研究所	宮城県多賀城跡調査研究会所設立50周年記念企画「多賀城跡・発掘調査のあゆみ20-20」に掲載するため		刀子写真 1点 山王道跡出土唐紙文書(百葉手) 写真 1点 山王道跡千堀田地区出土漆塗軸巻本兼葉写真 1点 山王道跡出土漆器上蓋(籠音合) 写真 1点 高崎道跡遺物出土状況(方灯台) 写真 1点 唐崎道跡写真 1点 国宝鑑定元写真 1点 市川橋遺跡遺物写真 2点 市川橋遺跡軸巻写真 2点

(2) 資料調査の受入

年月日	調査機関	目的	調査対象資料
令和元年6月1日	個人	論文執筆のため	市川橋遺跡第27次調査出土ナイフ形石器 1点
令和元年9月10日	宮城県多賀城跡調査研究所	報告書「多賀城跡施釉陶器」刊行にあたり多賀城跡と城外出土資料の比較を行うため	山王道跡出土縁軸・灰釉陶器76点 市川橋遺跡出土縁軸・灰釉陶器 18点 西沢遺跡出土灰釉陶器 1点 高崎遺跡出土施釉陶器 6点

(3) 収集（寄贈）資料

資料名	品目	数量	寄託・ 寄贈元	年代	法量(縦×横 cm)
民俗資料	掛軸	2	大代山の神講		
古文書	御観音講名簿	1	大代山の神講		
民俗資料	鼓	1	個人		

(4) 出土資料の保存処理

木製品については、ほ場整備事業に伴う発掘調査で出土した木製品について、リース契約により借り上げているPEG含浸装置を用いて、保存処理を施した。まずEDTAを用いた脱色処理を行ったのち、50%のPEG溶液に資料を浸し、徐々に濃度を上昇させ、製品中に含まれる水分とPEGを置換した。

鉄製品については国庫補助事業による保存処理を一時的に休止したことから、本年度は保存処理を実施しなかった。

当センターではこれまで市内遺跡で出土した木・鉄製品等脆弱遺物の保存処理を継続的に行っており、特に木製品については年代の特定できる全国的にも貴重な資料を数多く収蔵している。

一方でこれら脆弱遺物の保管環境は決して良好ではない。当センターは山王・市川橋遺跡等から出土した木質遺物を多数有しており、今後も資料数は増加するものとみられる。また、考古資料のみならず一部に重要な古文書・民俗資料等も保管されていることから、埋蔵文化財緊急調査と普及啓発等の事業を優先する余り文化財の保管・管理や保存環境悪化を招くことがないよう、センター全体で保存環境整備に努めていく必要がある。

(5) 埋蔵文化財保存活用整備事業

平成29年度に調査資料デジタル化事業でスキャニングした写真フィルムなどの基礎整理を行った。

5 事務報告

(1) 埋蔵文化財調査センター大規模改修工事

当センターは、開館から30年以上が経過したことから、公共施設等総合管理計画に基づき、経年劣化した施設の改修工事を実施した。平成31年度は、1階収蔵庫、2階収蔵庫、2階常設展示室、空調設備、電気設備等の改修工事を行った。そのため、種々制約が生じ、常設展示を閉鎖し、企画展開催を中止せざるを得なかった。令和2年度も改修工事を行う予定である。

また、埋蔵文化財調査センター体験館のエレベーターの改修工事も実施した。

○工事内容

・埋蔵文化財調査センター

1階 一般収蔵庫 既設鋼製棚の一部を書棚に改修

器具庫・第一整理室 棚足場の設置

第一整理室 壁面塗装の塗替

中2階 特別収蔵庫 木製棚一部撤去及び木製スノコ床のケイカル板養生の追加。

2階 常設展示室 受付カウンターの設置、展示室入口扉の改修

電気設備工事

2階収蔵展示室 出入口照明LED更新

映像設備更新

展示室呼出設備工事

3階収蔵展示室 照明設備 撤去・新設
 非常放送設備 撤去・新設
 自動火災報知設備 撤去・新設

機械設備工事

- 1階 特別収蔵庫 全熱交換型換気扇更新
- 3階 収蔵展示室 天井内ダクト 移設
 天井面ダクト吹出口 移設
- 各所 既設ダクト 改造
- ・多賀城市埋蔵文化財調査センター体験館（多賀城史遊館）
 エレベーター改修工事

（2）平成31年度事業費（内訳）

事業名	支出額 (円)	内 容
開発協議調整事業	274,635	埋蔵文化財の取り扱いに係る事務事業費
出土品等整理保存（市単独）	480,762	市内遺跡出土木製品・金属製品保存処理費
出土品等整理保存（国庫補助）	0	市内遺跡出土木製品・金属製品保存処理費・補助関係庶務事務費
埋蔵文化財緊急調査事業（市単独）	1,166,802	試掘・確認調査 公共事業・小規模開発関係調査費
埋蔵文化財緊急調査事業（国庫補助）	20,894,768	市内遺跡発掘調査費
埋蔵文化財受託事業	15,958,877	民間の開発行為伴う市内遺跡発掘調査費
埋蔵文化財受託事業（ほ場整備）	91,460,069	ほ場整備事業に伴う市内発掘遺跡調査費
埋蔵文化財緊急調査事業（復興交付金）	27,214,831	東日本大震災に伴う市内遺跡発掘調査費
収蔵資料整理保存事業	519,613	年報・報告書（市単独）作成 書籍管理・データ入力
展示・報告会等開催事業	1,919,907	連報展・資料展等の開催 報告会・講演会等開催
埋蔵文化財調査センター体験館 管理運営費	4,043,833	体験館の施設維持・管理費
埋蔵文化財保存活用整備事業	382,786	収納写真等整理
歴史講座開催事業	26,802	史都多賀城歴史講座開催
埋蔵文化財調査センター改修事業	49,599,920	埋蔵文化財調査センター大規模改修
埋蔵文化財調査センター体験館改修事業	3,520,000	埋蔵文化財調査センター体験館エレベーター改修
埋蔵文化財調査センター庶務事務	21,785,176	埋蔵文化財調査センター運営費
全国公立埋蔵文化財センター 連絡協議会推進事業	235,040	総会・研修会等参加費
合計	239,483,821	

（3）組織・職員体制



（令和2年12月現在）

橋本団貝塚・樹形団貝塚発掘調査学史

小原 一成

1 はじめに

宮城県のほぼ中央、太平洋沿岸部に位置する多賀城市では、これまで 900 か所を超える地点で発掘調査が行われてきた。その始まりは古く、1919 年（大正 8 年）の大代地区に所在する橋本団貝塚（大代貝塚）（註 1）と樹形団貝塚の発掘調査にまでさかのぼり、2019 年（平成 31 年）はこれらの発掘調査から 100 周年にある。本稿は、市内遺跡発掘調査 100 周年を記念して、2 つの貝塚に関する記事を読み解きながら、当時の経緯と経過の概要を整理して提示することを目的とする。

2 橋本団貝塚・樹形団貝塚発掘調査前夜

（1）明治期の縄文貝塚研究開始と宮城県への展開

1877 年（明治 10 年）、東京帝国大学に招聘されたアメリカ人動物学者 E. S. モースが東京都大森貝塚を発掘調査し、近代日本考古学の幕開けとともに縄文貝塚研究も始まる。その後縄文時代研究は日本人種論が主要な争点のひとつとなり、貝塚の調査は坪井正五郎や八木築三郎等の人類学者に引き継がれながら日本各地に広がりを見せる。

坪井らは宮城県にも来訪し、後に郷土史家として縄文遺跡の調査を積極的に進めることになる齋藤養次郎、遠藤源七、毛利總三郎らと親交が生まれる。坪井らに触発されるように、明治 40 年代には齋藤が宮城県石巻市宝ヶ峯遺跡、遠藤と毛利が同沼津貝塚等を発掘調査し、多数の遺物が発見される（藤沼 1981）。

（2）大正期の縄文人骨への関心と貝塚発掘の契機

続く大正時代になると、東北大学に松本彦七郎（大正 3 年：理学部）、長谷部言人（同 5 年：医学部）、山内清男（同 13 年：医学部）、喜田貞吉（同 13 年：法文学部）が相次いで赴任し、地域考古学の推進や後進の育成等の基幹的役割を担っていくこととなる。特に松本と長谷部は、自身の専門領域である古生物学と形質人類学の観点から、縄文

人骨の収集を主要な目的のひとつとして貝塚の発掘調査を積極的に行うこととなる。

貝塚から人骨が出土することは大森貝塚の発掘調査以来知られており、千葉県加曾利貝塚・堀之内貝塚、愛知県福山貝塚等の発掘調査で類例が蓄積される。1916 年（大正 5 年）からは京都帝国大学（当時）による大阪府国府遺跡の発掘調査で多数の縄文人骨が出土し、1918 年（大正 7 年）には小金井良精により抜歯がある縄文人骨が報告される（小金井 1918）。これらの調査研究成果により、縄文人骨研究が全国的に活発化するとともに、骨等の有機物が良好に遺存する貝塚への関心がいっそう高まった。東北地方の貝塚も、明治時代に岩手県中沢浜貝塚で多数の縄文人骨が発見された事例等があり、早くから注目されていた。宮城県でも、1918 年から 1919 年にかけて松本らが宮城県登米市青島貝塚や同東松島市里浜貝塚を発掘調査し（松本 1919）、多数の縄文人骨を発見するなど成果が挙げられていた（小原 2005）。

1916 年に東北帝国大学医科大学助教授（当時）に赴任し、1918 年の松本による里浜貝塚の発掘調査に参加していた長谷部言人（第 1 図）は、1918 年 10 月に宮城県七ヶ浜町大木團貝塚で人骨を収集するなど（遠藤・遠藤 1979）、縄文人骨の発見を目的とした貝塚の調査を開始していた。



第 1 図 大正 8 年頃の長谷部言人（東北大学史料館蔵）



第2図 昭和13年の大代地区周辺の地図
(長谷部1919a・山内1925等から貝塚の位置を推定)

3 橋本圓貝塚の発見と発掘調査

(1) 橋本圓貝塚の発見

橋本圓貝塚は、塩釜から七ヶ浜菖蒲田浜に至る道路沿い、貞山畠に架かる大代橋から東に5丁（約550m）に露呈する横穴からさらに半丁東側（約50m）の道路に面し、元々松林であった砂丘に位置する（第2図）。当時の地形は、道路より北側40mまで丘陵が伸び、南側の裾は両翼に分かれる。その間は底辺20m、高さ10mの三角形状に展開する緩斜面が形成され、貝塚の端はその底辺部分に立地する。1918年11月頃から地権者が開墾のために砂丘を削平し、1919年1月20日頃に南端を切り通した際に、横穴数基と貝塚の一部が露出した。この情報を清水東四郎から得た長谷部は1月30日に現場視察したところ、人骨が出土したとの話を聞き、既に墓地に再埋葬されていた人骨を掘り起こして実見した（長谷部1919a）。この人骨発見が、長谷部の形質人類学的専門見地から橋本圓貝塚に興味を抱いた要因であり、翌月に発掘調査を実施するに至った契機であったと考えられる。

(2) 橋本圓貝塚の発掘調査

2月8日、長谷部は未開墾地を借用して貝塚の発掘調査を実施した（長谷部1919a）。平面規模は不明であるが、地表から少なくとも2m掘り下げ泥砂層に達し、その上部に堆積する貝層は5~6

層存在すると観察する。人骨が出土した層は下から3層目の層もしくはその下の灰土層であると推測している。貝層はハマグリが主体であり、カキやカラスガイも見られ、歯骨は多くない。

東京大学総合研究博物館が所蔵する橋本圓貝塚出土資料は、土器と骨角器である。土器は完形に近いものを含む大洞C 2式の壺・鉢・浅鉢と平底の製塩土器がある。骨角器は頭顎鉄・固定鉄・刺突具・簪・加工痕のある骨片が見られる（多賀城市史編纂委員会編1991）。このほか、糞石に類似した遺物も出土している（長谷部1919d）。

長谷部が1月に来跡した際に確認した人骨は老年男性と鑑定され、体幹及び上肢・下肢骨が認められるが、頭骨は発見されなかった。長谷部はこれらの人骨を観察し、出土地点とされる場所から約2m離れたところにある後代の横穴墓に属する可能性を疑いながらも、石器時代人骨の特徴を有していると鑑定している（註2）。

また発掘調査後に、橋本圓貝塚前方の砂丘で発見された頭骨も収集している（長谷部1919b、諏訪他2017）（第3図）。この頭骨は、1919年4月26日に岩手県細浦上の山貝塚で頭骨を発見するよりも前に収集したとされていることから、2月8日以降4月26日までの間に収集した資料と考えられる。この頭骨は上顎側切歯が抜歯されており、長谷部は石器時代の人骨の可能性があると推測するが結論には至っていない。また長谷部（1919b）では、挿図として頭骨と下顎骨を並べた写真が掲載



第3図 橋本圓貝塚出土頭骨（東京大学総合研究博物館所蔵 The University Museum, The University of Tokyo）

されているが、これらは別個体と報告されている。

一方、長谷部(1919c)では「余の採集したるものの中、陸前宮城郡多賀城村橋本貝塚所出の一下顎骨(六号、性不明)には抜歯の跡がない」と報告している。この時、側切歯の抜歯がある頭骨を既に有しているにも関わらず、抜歯のない下顎骨のみを記述している点は、頭骨の時期比定に関する問題も考慮した可能性が考えられる(註3)。

上記のものを含め、東京大学総合研究博物館には合計4体分の橋本貝塚出土人骨が保管されている(遠藤・遠藤1979)。これらのことから、長谷部は2月8日の調査以後も何度か橋本貝塚の資料を得る機会があったと考えられる。

4 樹形圓貝塚の発掘調査と紡圧痕土器の発見

(1) 樹形圓貝塚の発見と発掘調査

樹形圓貝塚に関しては、長谷部の報告には触れられておらず、後年に発表された山内(1925)に詳しい。長谷部は、橋本貝塚の発掘調査の際に、同貝塚より南東150歩(約90m前後)、道路の北側に展開する低砂丘の東辺に位置する貝塚を新たに発見し、これが現在樹形圓貝塚と呼ばれるに至っている。

当時の状況については、橋本貝塚が砂層に覆われているのに対し、樹形圓貝塚は砂層中に形成されており、層序的に橋本貝塚に後続する貝塚と考察されている。貝層は非常に薄く、貝殻や歯骨片を有する土器包含層の様相を呈している(註4)。長谷部は、橋本貝塚を発掘調査した翌月の1919年3月16・17日に、数人の人手で樹形圓貝塚を発掘調査し、石油箱1個分の遺物が出土した。

東京大学総合研究博物館が所蔵する樹形圓貝塚出土資料は、多數の土器と少量の石器である。土器の多くは樹形圓式の鉢・深鉢・高杯・壺等と製塙土器である。石器は太形船刃石斧と石製紡錘車である(多賀城市史編纂委員会編1991)(註5)。自然遺物は所蔵されていないが、『日本縄文石器時代食料総説』にはハマグリ・カキ・アサリが挙げられている(酒詰1961)。

(2) 紡圧痕土器の発見

樹形圓貝塚出土資料から底部に紡錘の圧痕がある土器(第4図)を発見したのは、山内清男である。山内は、1924年(大正13年)秋に東北大医学部に副手として赴任し、長谷部の下で出土資料の整理を行っていた。出土土器の底部木葉痕を型取りしていた際に、4点の紡錘状の圧痕を発見したという(佐藤編1974)。これを紡錘の圧痕と推定し、石膏を作り松村諒や草野俊助に送り鑑定を求めたほか、濱田耕作・河野常吉・小田島綱郎らに実見してもらい、紡錘であるとの言質を得る。

山内はこの紡圧痕土器を論拠とし、1925年(大正14年)に「石器時代にも紡あり」と題した論文を発表した。その中では、土器底部に付いた木葉の痕跡の観察が詳細に記述されており、この木葉を土器製作時の粘着防止又は移動のために下敷きとして用いたものとみなし、紡圧痕は土器製作時に介在した異物の痕跡と推測する。山内は、本論中では樹形圓貝塚出土土器を縄文時代終末期に位置づけ、石器時代にも紡作農耕が行われていたと推定した。しかし、後年東日本の縄文晚期土器編年を整備する際に、大洞A'式に後続する弥生時代土器の特徴が多い「樹形式」として年代観を修正している(山内1930)。

なお、この紡圧痕土器は製塙土器の可能性が指摘されている(多賀城市史編纂委員会編1991)。山内(1925)には、紡圧痕土器の比較資料として200数点の橋本貝・樹形圓貝塚出土土器の底部



第4図 樹形圓貝塚出土底部紡圧痕土器(レプリカ)

を観察したことが記されており、山内が個人的に収集した橋本貝塚出土資料は全て製塙土器である（岡田・小澤 2009）。これらのことから、橋本貝塚出土山内清男資料は、初圧痕土器に類似する比較関連資料として収集されたものである可能性も考えられる（註6）。

その後本貝塚出土遺物については、杉原莊介により単一時期の一括資料と推定され、「南関東に於ける小田原後期、北関東における野沢期後期」に並行する東北地方の弥生時代中期土器編年との標識資料として「樹形圓式」が設定された（杉原 1936・1939）。

5 おわりに

長谷部が橋本貝塚・樹形圓貝塚を発掘調査した1919年は、東北地方及び宮城県における縄文人骨発見の第一次ピークが始まった頃にあたる（小原 2019a・b）。橋本貝塚発掘のうち、長谷部は岩手県細浦上の山貝塚、大洞貝塚や青森県是川一寺貝塚等の発掘調査を実施する。これら各地で収集した埋葬人骨を基礎資料として、縄文人の埋葬姿勢や頭位方向、抜歯風習や土器棺墓の研究を発表し、縄文時代葬墓制研究の先導者のひとりとなった。橋本貝塚を紹介した記事の最後を締める「一般に貝塚を掘れば必ず人骨が出て来るものとも考へられる」（長谷部 1919a）との記述から読み取れるように、長谷部が貝塚調査の手応えを掴んだと考えられる橋本貝塚の発掘調査は、縄文時代の葬墓制から当時の精神文化や社会構造等を追究した先駆的な発掘調査として学史的意義がある。

また、長谷部や松本による貝塚の調査は、結果として考古学に関する豊富な学術資料の蓄積や層位的な発掘調査方法の確立等をもたらし、土器研究の進展にも大いに貢献した。その産物のひとつが樹形圓貝塚における初圧痕土器の発見と言える。この発見は、弥生時代に稻作農耕が存在していたことが定説化される契機となった学史的に重要なものとして全国的に知られている。

本市においても、近年の多賀城IC付近の山王・市川橋遺跡で弥生時代の水田跡を発見したり（多

賀城市教育委員会 1997 等）、多賀城跡の五万崎地区で石臼丁が出土したりするなど（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）、弥生時代に稻作農耕が営まれていた痕跡が発見されている。樹形圓貝塚の発掘調査と初圧痕土器の発見は、全国的な学史的意義はもちろんのこと、本市においても弥生時代に稻作農耕社会が存在していたことを先駆的に立証するものであり、地域史的にも極めて重要な研究成果である。

本稿の作成にあたり、相澤清利氏からご意見をいただいた。画像の掲載にあたっては、東北大歴史博物館（第1図）、東京大学総合研究博物館（第3図）から資料を提供して頂いた。記して謝意を表するものである。

註

- (1) 橋本貝塚の現在の遺跡登録名称は大代貝塚であるが、本稿では学史的意義を重視し、橋本貝塚と表現する。
- (2) この人骨発見については、当時の河北新報において「大代の洞窟から人骨土器の新発見」の見出しで報じられ、長谷部の所見が掲載されている（『河北新報』大正8年（1919年）2月20日号）。
- (3) 東京大学総合研究博物館は、この頭骨を長谷部言人が最初期に収集した縄文時代人頭骨と評価している（諫訪他 2017）。
- (4) ただし、山内は樹形圓貝塚の発掘調査には参加していないことから、長谷部が記録していた当時の状況を読み解いたか、現地踏査等により状況を把握したものと考えられる。なお、1970年代以降の橋本貝塚及び周辺遺跡の調査により（多賀城市教育委員会 1987・1989・1993・1994・2012・2018、宮城県教育委員会 1975 等）、両貝塚周辺の遺跡の広がりはある程度確認できているものの、残念ながら長谷部が発掘調査した正確な位置は現在不明である。
- (5) 石製紡錘車のほか、須恵器片が3点出土しており、これらは混入の可能性があると推測されている（山内 1925）。
- (6) 当時はまだ製塙土器の認識ではなく、同種の土器は「軽く脆く、無紋で巻上の痕著明な又は竪目的ある土鉢形のもの」（長谷部 1919a）、「深鉢形粗面無紋土器」（山内 1925）等と表現される土器に属すると

考えられる。ただし、橋本圓貝塚出土山内清男資料は収集時期が不明なため（岡田・小澤編2009）、収集目的等についてはなお検討の余地が残る。

引用・参考文献

- 小金井良精 1918 「石器時代人に上大齒を抜き去る風習ありしことに就いて」『人類学雑誌』33-2 pp. 31-36
- 長谷部言人 1919a 「陸前国宮城郡多賀城村大代橋本圓貝塚」『人類学雑誌』34-1 pp. 37-39
- 長谷部言人 1919b 「上齶外切歯を缺く貝塚頭蓋」『人類学雑誌』34-8 pp. 274-276
- 長谷部言人 1919c 「石器時代人の抜歯に就て」『人類学雑誌』34-11・12 pp. 385-392
- 長谷部言人 1919d 「石器時代遺跡に於ける糞石」『人類学雑誌』34-11・12 pp. 394-396
- 松本彦七郎 1919 「宮戸島里浜介塚人骨の埋葬状態（予報）」『現代之科学』7-2 pp. 167-181
- 山内清男 1925 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40-5 pp. 181-184
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」『考古学』1-3 pp. 39-57
- 杉原莊介 1936 「下野・野沢遺跡及び陸前・樹形圓貝塚出土の弥生式土器の位置について」『考古学』7-8 pp. 370-384
- 杉原莊介 1939 「陸前樹形圓貝塚出土の石器」『考古学』10-11 pp. 568-569
- 酒詰仲男 1961 『日本縄文石器時代食料総説』土曜会多賀城町誌編纂委員会編 1967 『多賀城町誌』
- 佐藤達夫編 1974 『日本考古学選集 21 山内清男集』築地書館
- 江坂輝彌編 1975 『日本考古学選集 15 長谷部言人集』築地書館
- 宮城県教育委員会 1975 『宮城県文化財発掘調査報告（昭和48・49年度分）』宮城県文化財調査報告書40集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1977 多賀城跡一昭和52年度発掘調査概報一』
- 遠藤美子・遠藤万里 1979 『東京大学総合研究資料館収蔵日本縄文時代人骨型録』東京大学総合研究資料館標本資料報告3
- 藤沼邦彦 1981 『宮城県における縄文時代研究略史（江戸時代～昭和20年）附 宮城県における縄文時代研究史年表・関係文献目録』『東北歴史資料館研究紀要』7 pp. 1-42
- 多賀城市教育委員会 1987 「II. 昭和61年度調査報告（1）橋本圓貝塚」『年報1 昭和61年度』多賀城市文化財調査報告書第14集 pp. 8-10
- 多賀城市教育委員会 1989 「I. 調査報告 1. 橋本圓貝塚（試掘）」『年報3 昭和63年度』多賀城市文化財調査報告書第20集 pp. 2-4
- 東北歴史資料館 1989 『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集25
- 多賀城市史編纂委員会編 1991 『多賀城市史 第4巻 考古資料』
- 多賀城市教育委員会 1993 「I 調査報告 4. 橋本圓貝塚試掘調査」『年報6 平成3年度』多賀城市文化財調査報告書第33集 pp. 9-10
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1994 「I 調査報告 2. 橋本圓貝塚試掘調査」『多賀城市埋蔵文化財調査センター一年報 第7号』pp. 9-10
- 多賀城市教育委員会 1997 『山王遺跡 I - 仙塩道路建設に係る発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第45集
- 小原一成 2005 「縄文時代墓制の基礎的研究法に関する一試論」『博古研究』29 pp. 1-20
- 岡田康博・小澤毅編 2009 『宮城県室浜貝塚資料 宮城県福浦島貝塚資料 宮城県橋本圓貝塚資料 山内清男考古資料17』奈良文化財研究所史料第84冊
- 多賀城市教育委員会 2012 「大代貝塚第5次調査」『多賀城市内の遺跡2 -平成23年度発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第108集 pp. 129-130
- 諏訪元他 2017 『人類先史、曙 東京大学総合研究博物館所蔵明治期等人類学標本101点写真集』東京大学出版会
- 多賀城市教育委員会 2018 「大代貝塚第6次調査」『新田・山王遺跡ほか一震災復興関係遺跡発掘調査報告I-』多賀城市文化財調査報告書第137集 pp. 298-335
- 小原一成 2019a 「東北地方における葬墓制研究の現状」『縄文時代葬墓制研究の現段階』縄文時代文化研究会 pp. 13-20
- 小原一成 2019b 「宮城県における縄文時代墓制の諸様相」『列島における縄文時代墓制の諸様相』縄文時代文化研究会 pp. 84-103

資料紹介 西沢遺跡出土の古代土器について

小原 駿平・桑折 暉

1 遺跡の概要

西沢遺跡は当市北東部の市川・浮島地区に所在している。松島丘陵から塙釜方面に向かって張り出した低丘陵上の南西端部に位置し、東西450m、南北700mの範囲を占めている。

本遺跡内では現在までに計37次の発掘調査を実施している(第1表)。第2次調査及び第30次調査では、造成範囲を面的に調査し、古代から中世にかけての遺構・遺物を多数発見している。また、第3次調査では鍛冶関連とみられる堅穴建物跡を発見している。第25次調査では周溝に瓦を据えた堅穴建物跡を、第37次調査では古代の掘立柱建物跡、堅穴建物跡等を発見している。

古代の遺構については、一部非ロクロ土師器を含むものが存在するものの、多くが平安時代に帰属するものと考えられ、西側に隣接する多賀城跡との関係が想定される。

本稿では、西沢遺跡第2次調査で発見したSX121出土土器を図示・紹介する。遺構の概要については『第2次調査概報』(多賀城市教育委員会2017)で既に報告済みであるが、一部未掲載資料が存在することから、改めて資料紹介を行うものである。

2 西沢遺跡第2次調査 SX121 出土資料

第1図-1は須恵系土器壺である。SX121の第1層から出土した。口径13.8cm、底径5.4cm、色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。胎土には赤色粒子と白色粒子を含み、焼成は良好である。底部は回転糸切無調整である。

第1図-2は須恵系土器壺である。SX121の第1層から出土した。口径13cm、底径6cm、色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)である。両面にロクロナデの痕跡が見られ、体部は直線的に外傾する。底部は回転糸切無調整である。

第1図-3は須恵系土器壺である。SX121の第1層から出土した。口径13.4cm、底径5cm、色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)である。内外両面に

ロクロナデの痕跡が見られ、体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で強く外傾している。底部は回転糸切無調整である。

第1図-4は須恵系土器小型壺である。SX121の第1層から出土した。口径9.8cm、底径5.8cm、色調はにぶい横橙色(10YR7/3)である。内外両面にロクロナデの痕跡が見られ、体部は直線的に外傾している。底部は回転糸切無調整である。

第1図-5は須恵器壺である。SX121の第1層から出土した。口径13.6cm、底径6cm、色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。内外両面にロクロナデの痕跡が見られ、底部は回転糸切無調整である。

第1図-6は須恵系土器高台付壺である。SX121の第1層から出土した。口径14.8cm、底径6.8cm、色調はにぶい橙(7.5YR7/3)である。内外両面はロクロナデの痕跡があり、高台を付けた際に体部の下部にナデ調整を行った痕跡が見られる。高台部はハの字に開く角高台であり、体部は直線的に立ち上がり、口縁部付近で強く外傾する。底部は回転糸切無調整である。

第1図-7は須恵系土器壺である。SX121の第1層から出土した。口径13cm、底径は4.5cm、器高は3.5cmである。色調はにぶい橙色(7.5YR6/4)である。胎土には赤色粒子と白色粒子を含み、焼成は良好である。底部は回転糸切無調整である。

3 SX121 出土土器の年代

壺類はほとんどが須恵系土器によって占められている。また、小型壺は口径10cm程度である。小型壺は1点のみであり、組成中に占める割合は低い。

須恵系土器高台付壺については、多賀城跡SK3167(宮城県多賀城跡調査研究会2014)や市川橋遺跡第14次調査SK565(多賀城市教育委員会1994)に類例が認められる。

出土した須恵系土器壺は口径13cm~14cmの範囲に収まり、器形の扁平化が見られない。

以上の諸特徴は、10世紀前葉頃の山王遺跡SX543

(多賀城市教育委員会 1991) や高崎遺跡 SX1080 (多賀城市教育委員会 1995) よりも相対的に新しく、10世紀後葉頃の SX2449 (宮城県多賀城跡調査研究所 1998) よりも古い時期のものと共通している。

したがって、10世紀中葉のうち、より新しい山王遺跡町地区 SK2850 (宮城県教育委員会 1998) と同時期のものと考えられる。

4 西沢遺跡 I C 期の遺構について（第2図）

『第2次調査概報』では、検出遺構を I 期（古代）と II 期（中世）に大別している（多賀城市教育委員会 2017）。このうち I 期については重複関係や建物主軸の傾きによって、A～C 期の 3 時期に細分しており、SX121 は I C 期に位置付けられる。本項では、平成 29 年度に実施した第 30 次調査の成果と併せ、改めて当該期の遺構について整理する。

この時期、緩斜面上には SB156・SB157 を中心とした掘立柱建物が規則的に配置されており、さらに東側へ展開するとみられるが、中世の遺構に破壊されており、判然としない。北側には縦柱建物 SB151・SB152 が立ち並び、物品を保管するための倉庫機能が想定される。西側では SB153・SB154 等の 小規模側柱建物が南向きに展開する（第2図）。

また、掘立柱建物群の外周部には、第 2 次調査 SX121 のほか、第 30 次調査 SK616・618 (多賀城市教育委員会 2018) 等、10世紀代の廐棄土坑が点在している。建物と土坑群の厳密な並行関係は不明であるが、I 期の終末年代については、10世紀後半まで下る可能性がある。

5 おわりに

西沢遺跡で出土した古代の土器について、資料紹介を行った。

本遺跡ではこれまでに計 37 回の発掘調査を行っており、その都度発掘調査報告書を刊行しているところであるが、一部に未刊行報告書も存在する。

また、報告書刊行に至ったものであっても、調査年次が古いものについては、諸般の事情で掲載出来なかつた資料も存在する。

今後は断片的な資料紹介のみならず、近年の成果

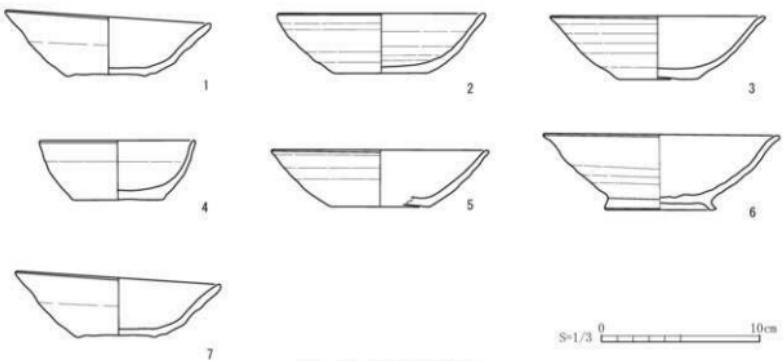
を踏まえた総合的な検討・再整理が必要である。

参考文献

- 多賀城市教育委員会 1991 『山王遺跡－第 9 回発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第 26 集
多賀城市教育委員会 1994 『市川橋遺跡ほか一平成 5 年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第 35 集
多賀城市教育委員会 1995 『高崎遺跡－第 11 回調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第 37 集
多賀城市教育委員会 2017 『多賀城市内の遺跡 1－西沢遺跡第 2 次調査の概報－』多賀城市文化財調査報告書第 134 集
多賀城市教育委員会 2018 『西沢遺跡第 30 次調査』『西沢遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第 139 集, pp. 15-64
宮城県教育委員会 1998 『山王遺跡町地区の調査－県道泉塩釜線関連遺跡調査報告書 II－』宮城県文化財調査報告書第 175 集
宮城県多賀城跡調査研究所 1998 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』
宮城県多賀城跡調査研究所 2014 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2013』

第 1 表 西沢遺跡調査一覧

番号	年度	発見遺構の年代	出土遺物	取扱い状況
第1回	平成10年度	古代・牛頭	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第2回	平成11年度	古代・牛頭	未収集	未収集
第3回	平成12年度	古代	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第4回	平成13年度	古代・中世	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第5回	平成14年度	古代・中世	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第6回	平成15年度	古代・中世	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第7回	平成16年度	古代	土師器・瓦陶器	年編区分1年度に 取扱い開始
第8回	平成17年度	古代・牛頭・瓦器	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器等	未収集
第9回	平成18年度	古代・牛頭・瓦器	土師器・瓦陶器・瓦子付土器	未収集
第10回	平成19年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第11回	平成20年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第12回	平成21年度	不詳	土師器・瓦陶器	未収集
第13回	平成22年度	不詳	瓦・瓦陶器	未収集
第14回	平成23年度	不詳	瓦・瓦陶器	未収集
第15回	平成24年度	不詳	瓦・瓦陶器	未収集
第16回	平成25年度	古代	土師器・瓦陶器・瓦	未収集
第17回	平成26年度	不詳	瓦・瓦陶器	未収集
第18回	平成27年度	不詳	瓦	未収集
第19回	平成28年度	古代・牛頭	土師器・瓦陶器・筒瓦土器	未収集
第20回	平成29年度	古代・牛頭	土師器・瓦陶器	未収集
第21回	平成30年度	古代・牛頭	土師器・瓦陶器	未収集
第22回	平成31年度	中世	土師器・瓦陶器・筒瓦陶器・口 沿付瓦陶器	未収集
第23回	平成32年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第24回	平成33年度	古代	土師器・瓦陶器・瓦	未収集
第25回	平成34年度	古代	土師器・瓦陶器・瓦	未収集
第26回	平成35年度	古代	土師器・瓦陶器・瓦	未収集
第27回	平成36年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第28回	平成37年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第29回	平成38年度	古代	土師器・瓦陶器	未収集
第30回	平成39年度	古代・中世	土師器・瓦陶器・筒瓦土器・瓦 口沿付瓦陶器	未収集
第31回	平成40年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第32回	平成41年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第33回	平成42年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第34回	平成43年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第35回	平成44年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第36回	平成45年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中
第37回	平成46年度	古代	土師器・瓦陶器	作成中

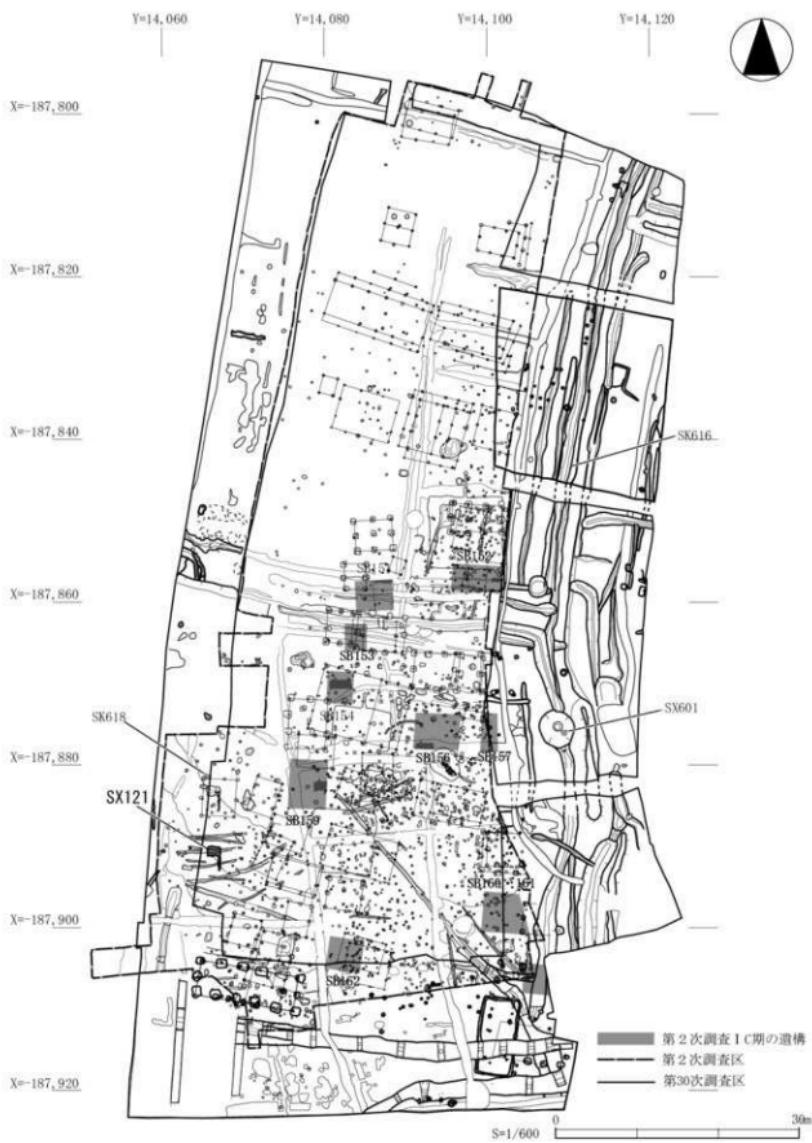


第1図 SX121 出土遺物

第2表 遺物観察表

(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録 番号
				外面	内面				
1	須恵系土器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	13.8 24/24	5.4 24/24	4.0	R62
2	須恵系土器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(13.0) 18/24	6.0 15/24	3.8	R64
3	須恵系土器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(13.4) 13/24	(5.0) 24/24	4	R66
4	須恵系土器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(9.8) 8/24	5.8 24/24	3.8	R65
5	須恵器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	(13.6) 1/24	6.0 8/24	3.6	R67
6	須恵系土器 高台付壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り後 高台貼付	ロクロナデ	(14.8) 20/24	6.8 24/24	4.8	R61
7	須恵系土器 壺	SX121	1層	ロクロナデ 底部: 回転糸切り	ロクロナデ	13.0 24/24	4.5 24/24	3.5	R63



第2図 西沢遺跡第2・30次調査区とIC期の遺構

市指定文化財 天童家文書・菊池家文書

瀧川ちかこ

天童家文書

1 天童家とは

江戸時代に作成された同家の系図によれば、天童家は清和天皇はじめ、足利・斯波の流れをくむ家柄である。14世紀頃、斯波兼頼の弟義宗が天童成生庄（現在の天童市）の地頭里見氏の養子に入り、次いで兼頼の孫頼直が里見を継ぎ、天授元年（1375）に天童城山を本拠地としたことで天童を名乗るようになった。戦国時代には村山地方を中心に勢力を伸ばしたが、天正12年（1584）、頼直から数えて11代目の頼久（のちの頼澄）の代に最上義光との戦いに敗れ、母方の祖父である国分盛氏を頼り陸奥国に落ち延びた。その後数年間の動向は不明であるが、遅くとも天正17年（1589）正月までには伊達政宗の家臣となっていたことがわかっている。

仙台藩における家格は一門、一家に次ぐ準一家で知行高は1340石余、宮城郡八幡村（多賀城市八幡）に在所拝領し、在郷屋敷と家中屋敷を構えた。

歴代の当主は、伊達家において一部隊を率いる大番頭を勤め、また準一家という家格は、一門、一家とともに伊達家のいわば擬制的家族の一員であることから、藩主の名代として歴代藩主やその夫人の忌日等に代参するという役割を担っていた。

2 天童家文書の概要

最古の資料は天文15年（1546）の「口宣案」で、昭和12年から昭和57年（1982）まで書き継がれた清和契約会の「当相手当前割当人名簿」まで、約400年間にわたる文書が伝えられていた。点数は断簡も含め、868点である。

内容は多岐にわたり、天童家文書の翻刻文及び調査成果をまとめた『天童家文書』の報告書では、「知行」「支配」「勤役」「文化」「納税・公金」「中世文書」「契約」「系図」「伊達家文書等」に分類している。

3 指定に至る経緯

天童家に文書が伝わっていることは、昭和42年刊行の『多賀城町誌』に「宮城郡八幡邑天童氏屋敷ならびに家中・足輕屋敷絵図」「素風土記」が掲載されていることから、この頃までには既に周知されていた。その後昭和53年から編纂が始まった『多賀城市史』においても、天童氏宛の知行状・目録等を中心に11件の文書を掲載しているが、その一方で原本が公開されたことはなく、現存する文書数をはじめ全体像は不明であった。

平成19年、天童家から、所蔵文書60件の調査依頼があり、本市近世史を解明する上で貴重な文書群であるという調査成果に鑑み、保存に万全を期すことを目指して同22年、文書の寄贈申し出を受けた。そして、多賀城市域における仙台藩の家臣である天童氏とその家臣団の様子を伝える貴重な資料であることから、平成22年7月に60件の文書を市指定文化財に指定した。

平成23年、東日本大震災後2ヶ月を経た5月半ば、津波被害を受けた同家内から、天童家の由緒にかかる系図をはじめとした多数の文書が発見された。これらの被災資料についても現当主から歴史解明に役立てほしいとの意向で寄贈を受けたことから、修復作業と並行して解説作業を実施し、前回指定の天童家文書と一緒になし、同等の価値を有するものであることから、平成28年度に市指定文化財に追加指定した。

4 主な文書の内容

（1）伊達政宗より天堂殿宛書状

天童頼久が伊達政宗に正月の祝いの品を献上したことに対し、政宗が小袖を贈ったことを記す、正月儀礼の一端を示す書状である。年月日は記されていないが、花押の特徴から天正17年のものであることが判明している。これまで、頼久と政宗の主従関係を示す最古の資料は、『貞山公治家記録』天正18年正月13日の記事であったが、本資料により、遅

くともその前年、天正 17 年には政宗の家臣になっていたことが確定できる重要な資料である。

(2) 知行狀

藩主と家臣との間に主従関係が結ばれた証になる基本文書で、双方にとって極めて重要なものである。天童家には寛永 21 年（1644）の 2 代藩主忠宗黒印状から天保 13 年（1842）、13 代藩主慶邦朱印状まで残されている。

(3) 系図等

天童氏自身の系図 11 点、諸家系図 10 点、天童氏の系統に関わる文書 14 点、計 35 点が伝わっていた。天童氏自身の系図のうち源姓最上天童氏系図は、天童氏が清和天皇を祖とし、足利、斯波と続く清和源氏の正統を引き継ぐ家であることを示している。軸頭に水晶を用いるなど装飾性にも優れ、天童家にとって重要な系図であることが窺えるものである。

また、諸家系図は天童氏と関わりのある伊達氏、大崎氏、留守氏などの系図である。さらに天童氏の系統に関わる文書には、系図にかかる照会状が含まれている。天童城落城や、頬瀧以後三代にわたり養子によって家名を継承するなどの結果、家の由緒はたどりくなっていたと考えられる。そのため古記録などを頼りに 4 代定義、5 代頼真の時に系図作成のための調査を行い、その際、京都の公卿の家臣などに対し、作成した系図内容の添削なども求めていたことが判明している。

仙台藩準一家としての役割を果たす上で、何より重要視されていたのが、家の由緒で、そのためには清和源氏の流れをくむという正統性を明らかにする必要があったと考えられる。これらの系図類からは、そうした意図が窺える。

(4) 宮城郡八幡邑天童氏屋敷ならびに家中・足軽屋敷絵図

天和元年（1681）、幕府からの問い合わせに応え、重臣たちの在郷屋敷の調査を仙台藩が実施した。その際に天童家に残された控えを、文政 7 年（1824）に写し直した絵図である。天童家の屋敷を中心図左側に家中屋敷、右側に足軽屋敷と寺が配置される傾向が見て取れる。加えて右側には百姓家や、天童家との主従関係にない者の住居もあり、近世的な身

分制が徹底する以前の早い時期に、その原型が既にできあがっていたことが伺える資料である。

(5) 御用留帳・御用留

御用留帳は、天童家の仙台屋敷における責任者である留主居方が作成したもので、文化 5 年（1808）の断簡と、文政元年（1818）1 年分が完全な形で残されていた。仙台藩の記録には、城下の仙台屋敷における留主居方への言及はほとんどなく、その奉公と役割の実態解明につながる貴重な資料である。

また御用留は、在郷屋敷における家老方が作成したもので、文化 12 年（1815）から文久元年（1861）までの資料が断片的に残っており、八幡在住の天童家家臣團についての数多い情報が含まれている。

(6) 中世文書

2 通の口宣案と相馬盛胤・義胤連署状写、貞山様御自筆御書之写の 4 点である。

口宣案はいずれも天文 15 年（1546）のもので、1 通は黒川景氏を下總守に、もう 1 通は黒川植国を修理大夫にそれぞれ任ずるというものである。黒川氏と天童氏は、2 代重頼の母が黒川晴氏の娘であるということと、どちらの家も最上氏の分家であったという縁がある。

相馬氏関係の文書が残されていたのは、3 代頼長（後、涌谷に戻り伊達宗重と名乗る）が相馬盛胤の曾孫にあたり、頼長が涌谷に戻った後、天童家に残した娘長徳院が玄孫にあたるという関係からであろう。

4 点目の資料は、2 通の政宗文書を 1 枚の料紙に書き写したものである。前半は上杉氏の重臣である本庄繁長が最上勢を敗ったことが、後半は天童氏が仙道地方（現在の福島県中通り地方）にいたことを示す内容となっている。

(7) 契約関係

天童家の家臣で構成されていた契約講関係の文書で、文化 3 年（1806）以来近代まで引き継がれていたものである。明治時代以降は天童家も加わり、清和契約会という名称となったが、平成 15 年に解散した。江戸時代の契約講文書が天童家に

残されていたのは、旧家臣の子孫が、文書の散逸を防ぐために天童家に託したからであるという。

菊池家文書

1 菊池家とは

菊池家は江戸時代において、代々市川村の肝入を勤めた家である。市川村に住み始めた時期は不明であるが、安永3年（1774）の『市川村風土記御用書出』中の「代数在之御百姓」に山岸屋敷肝入市兵衛とあり、同地で代々続く由緒ある家柄と認識されていたことがわかる。

同家に残る弘化3年（1846）の「菊地八郎古行身上書」には、八郎が「御足軽御小人組抜並」の待遇に処され、知行高500文を与えられていることが記されている。「御足軽御小人組抜並」とは、献金や特別な功労があった百姓・町人に与えられた待遇の一つ。身分は足軽・小人と同じ凡下（庶民）であったが、苗字・帯刀が許された。軍役の奉仕、あるいは凶作時の救済にあてる金穀や軍資金献上などに対して、このような身分と知行地を与えることがあつたといふ。

菊池家の当主が肝入を勤めていたことが確認される最も古い史料は寛文13年（1673）の人数改帳で、以後、一貫して市川村の村政を担当してきた。明治9年（1876）、天皇の東北地方巡行の折に、多賀城跡見学後の小休所として菊池家が利用されたのも、近世以来の家柄や、功績を重んじたことに起因するものであろう。

2 菊池家文書の概要

慶安元年（1648）の市川村新田検地帳写から明治30年（1897）の地所売渡証まで、約250年間にわたる261点の文書群である。内容については、菊池家文書を所載した『多賀城市史』7（平成5年＝1993年刊行）では、「検地帳」「農民の持高調査」「年貢の割当と取立」「散田年貢の取立」「人数改帳」「藩の法律および訴願」「幕府巡回見衆」「諸普請と雇傭労働」「万用記簿」の9項目に分類、紹介している。このほか書状や絵図、日々の覚書などが残されていった。

3 指定に至る経緯

昭和59年から開始した多賀城市史の刊行中、新たに確認されたものである。菊池家は江戸時代、市川村において仙台藩の肝入を勤めた家であることから、同家に伝わる文書は市川村の村政にかかわるもののが主であり、こうしたことから、近世における村の実態やその推移を知ることができるようになった。

平成5年3月、翻刻文の一部を『多賀城市史7歴史史料（三）』として刊行し、さらに調査成果を踏まえ、江戸時代における市川村の村政を具体的に物語り、また従来不明であった本市の近世前期の様子を明らかにしたことから、平成17年、市指定文化財に指定した（註）。

4 主な文書の内容

（1）検地帳

文書群のうち最も古い資料が慶安元年（1648）の市川村新田検地帳写である。仙台藩において藩政の基礎となる検地は寛永17年（1640）に初めて実施されたが、その後江戸時代を通じて總検地が行われることはなかった。本資料は寛永検地に追加される部分的な検地ではあるものの、その様式や内容を知ることができるものである。

（2）農民の持高調査

市川村の農民たちが1戸ごとに持つ田畠・屋敷地を調査した際の記録である。特に天明2年（1782）の資料は、末尾に市川村に土地を持つ全ての農民の名前が見え、この調査が村人総立ち会いで、しかも村独自の必要性から実施されていた可能性がある点、注目される。

（3）年貢の割当と取立

市川村に知行地を持つ藩士が、村に年貢・諸役の割当と取立を行っている内容を示すものである。資料から林基太夫、大庭八右衛門、新田勘助が市川村に知行地を所持していたことがわかる。また、これら藩士の名とともに、菊地市郎右衛門の名も見えており、市郎右衛門の前代、八郎が御足軽御小人組抜並という身分とともに500文の知行地を与えられ、それを次代の市郎右衛門が引き

継いでいることが確認できる。なお、高橋村に知行地を持つ武田氏の資料も文書群に含まれていた。これは菊池家が武田氏の地肝入であったことから、同家に保存されていたものであろう。

(4) 散田年貢の取立

さまざまな理由で年貢負担者が不在となった耕作を散田といい、その土地の年貢を肩代わりして納めた際の文書である。このような田については、村が責任をもって耕作するなどして藩に年貢を納める義務があり、その責任者には肝入があたることが多かった。菊池家に残った13点の関係資料は、幕末から明治時代以降にかけての変化がたどれる貴重なものである。

(5) 人数改帳

宗門改帳と同じもので、各戸ごとに家族の人名、年齢を書き上げ、さらにその戸が檀家であることを寺院が証明するというものである。肝入が調査の上記載した。仙台藩では、五人組帳をも兼ねていた。菊池家には、從来未発見であった江戸時代前期のものを含む11点の人数改帳が残されており、各戸ごとに家や身分の変化を詳細にたどることができる。

(6) 幕府巡見衆

幕府の巡見使一行が仙台藩領内を通行する際、案内役を務める肝入の手控えとして作成されたものである。幕府は必要に応じて大名領に巡見使を送って実情を視察しており、同家には享保2年(1717)・天保9年(1838)・年次未詳の3点が残されていた。安永2年(1773)から同9年にかけて、仙台藩が村ごとに提出させた「風土記御用書出」とは、時期や内容の異なる領内地誌としてみることができ興味深い。

(7) 諸普請と雇傭労働

幕末の物価や職人・日雇労働などの事情を知る手がかりになる資料で、菊池家の広間や別荘の普請、屋根の葺き替えを行った際にかかわった職種・職人名、材料などが賃金、費用とともに記されている。

おわりに

以上紹介した古文書は、一方が仙台藩の重臣の家蔵文書、また他方は市川村の肝入の家蔵文書と、対象的な内容をもつ資料ではあるが、いずれも本市の近世史を語る上で、欠かせないものである。しかしながら、これまで展示等で広く一般の目に触れる機会が少なく、その価値が十分に伝わっているとは言い難い。市を代表する歴史資料のより積極的な公開普及を進めなければならないと痛感している。

なお、市指定文化財天童家文書・菊池家文書の一覧については、多賀城市ホームページに掲載しているので、参照いただきたい。

<http://www.city.tagajo.miyagi.jp/shiseki/bunkazai/index.html>

註

現在の家名は「菊池」であるが、文書中の表記は全て「菊地」であることから、資料からの引用の場合のみ「菊地」の表記とする。

引用・参考文献

- 多賀城町誌編纂委員会 1967『多賀城町誌』
- 多賀城市史編纂委員会 1985『多賀城市史5 歴史史料(一)(二)』
- 多賀城市史編纂委員会 1993『多市史2 近世・近現代』
- 多賀城市史編纂委員会 1993『多賀城市史7 歴史史料(三)』
- 多賀城市教育委員会 2013『天童家文書I』多賀城市文化財調査報告書第113集
- 多賀城市教育委員会 2014『天童家文書II』多賀城市文化財調査報告書第117集
- 多賀城市教育委員会 2015『天童家文書III』多賀城市文化財調査報告書第122集
- 多賀城市教育委員会 2016『天童家文書IV』多賀城市文化財調査報告書第129集

多賀城市埋蔵文化財調査センター年報

－平成 31 年度－

令和 2 年 12 月 22 日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目 27 番 1 号
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目 1 番 1 号
電話 (022) 368-1141

印刷 株式会社 工陽社
塩釜市尾島町 8 番 5 号
電話 (022) 365-1151
